気高く生きる道を選択します

http://hatagaya-saisei-univ.jp

幡ヶ谷再生大学

HATAGAYA RE-BIRTH UNIVERSITY

Hatasai Magazine Vol.5

特定非営利活動法人　幡ヶ谷再生大学復興再生部　（23生都管特第1204号）

幡ヶ谷再生大学復興再生部とは？

2006年に仲間内のサークルとして始まった幡ヶ谷再生大学
陸上部や格闘部など、あくまで自分達の人間復興として集まって活動していた。
そんな中2011年3月11日に発生した東日本大震災
日本中、世界中に大きな衝撃と悲しい爪跡を残した。
その復興支援を主な目的とし、その他の危機的な災害が起きた際も
支援出来る非営利団体としてこの度新たに復興再生部を開校する。

幡ヶ谷再生大学復興再生部　部長　TOSHI-LOW

VISION（目的）

2011年3月11日に発生した『東日本大震災』
その被害をうけてしまった地域の子供達の未来構築を軸にそれに関わる全ての復興支援を目的とし活動する事。
また、その他予期せぬ危機的事態が発生した際は状況下に応じて対応していく事。

MISSION（使命）

身体的、精神的にも被害をうけてしまった子供達への明るい未来を構築していく事。
単発的なサポートではなく、長期を見越して復興への活動のサポートをしていく事。
幡ヶ谷再生大学の定義に則り、遊び心を忘れずに人間再生と被災地の復興を行っていく事。

CLARITY（明確さ）

当団体の役員は報酬や利益は一切受けず、全てを災害の復興支援に使用する事。
あくまで直接的に行動する事を前提に行動、リサーチし、他団体、自治体とも連携しあって明確なサポートをしていく事。
活動予定、活動結果を随時報告する事。

特定非営利活動法人　幡ヶ谷再生大学復興再生部　（23生都管特第1204号）

[幡ヶ谷再生大学 他学部紹介]

私達、幡ヶ谷再生大学では復興再生部以外にも学部を併設しております。
あくまで自分達の人間復興を軸に立ち上げたサークルですので、基本概念に変わりはありません。
その中で、私達の意思にご賛同頂いた方々と共にその他サークルも共有できたらと思っております。
現在、復興再生部にご賛同、ご支援頂いた方で、かつ陸上部に興味がある方は陸上部に参加が可能です。
復興再生という同じ志を持つ者同士共に走りましょう。
その他学部についても詳細はWEBにてご確認下さい。

陸上部　格闘部　山岳部　手芸部　二輪部　映像部　夜学部　農学部　読書部

活動履歴

2011/03/17~19	tactics recordsおよび水戸の仲間たちによって北茨城・いわき・高萩へ支援物資の募集と運搬（飲料水は岩手県宮古市へ）
03/29～04/02	避難所に直接物質を届けている札幌のハードコアバンドSLANG KO氏に託すために子供たちへのおやつを募集
04/04～05	上記で募集したおやつをBRAHMANのメンバーによる岩手県宮古市へ運搬
05/12～22	「オペレーション米騒動」岩手県・福島県・宮城県への送る支援物資の募集。集まったお米、約10トン
08/01～12	作戦コード「H2O」福島県南相馬市への支援物資支援物資（飲料水・お菓子・米・レトルト食品・保存食品）の募集。集まった飲料水、約25トン
08/13	上記で募集した飲料水等を「幡ヶ谷再生大学 南相馬キャンパス」LIVE前に支援物資受け入れ先の南相馬市「きっずくらぶ」へBRAHMANメンバー、スタッフ、茨城県、福島県の仲間による運搬
11/11	NPO（特定非営利活動）法人 幡ヶ谷再生大学復興再生部（23生都管特第1204号）取得
12/11～24	作戦コード「SMS」岩手県、福島県、宮城県への支援物資（お餅）の募集。集まったお餅、約7.5トン
12/24	作戦コード「SMS」で集まったお餅と支援物資を茨城県、福島県の仲間によるNBC作戦の募集場所に運搬。
2012/03/11	幡ヶ谷再生大学 開校
04/12～05/11	宮城県・牡鹿半島の小渕浜にてワカメ収穫作業の生徒募集及び派遣
04/30・06/10	6月17日~7月1日に首長恐竜の親子3体像展示イベントの会場になる、石巻の「みなと荘」の庭に数多く混在するガラス片撤去など、子供たちが安全に楽しく遊べるように地元の方たちと一緒に清示イベント会場のガラス片撤去と清掃整地作業
05/13	竜巻被害にあった茨城県つくば市北条にて瓦礫撤去作業
06/17～7/01	みなと荘にて、首長恐竜の親子の展示イベント開催（め組JAPAN/つなげる・つたえるプロジェクト）
09/15～16	東北AIR JAM 2012　幡ヶ谷再生大学 復興再生部 ブース出展
09/17～11/04	石巻市大街道子供広場作り。全3回
2013/02/07	幡ヶ谷再生大学 読書部として石巻市立湊小学校にて全学年、1クラスずつ読み聞かせを実施
02/25	仙台市立蒲町小学校にて、特別講師として「生きる」ということをテーマに授業を開催。未だ仮設の校舎のなか、元気で真摯な子供たちの姿は再生大メンバーにとって非常に勉強になる講義となる
04/29	宮城県・小渕浜子供広場作りに着手
07/07	幡ヶ谷再生大学 読書部として穀町幼稚園、ふたば保育園にて読み聞かせを実施
08/10～11	幡ヶ谷再生大学 復興再生部　SUMMER SONIC 2013東北復興 PROJECT「音遊海岸」にブース出展
12/05	幡ヶ谷再生大学 読書部として石巻市大原小学校全校生徒に読み聞かせ
2014/01/11	小渕浜子供広場完成(全13回)。4/29に小渕浜子供広場お披露目会。 地元の大原小の児童らによる獅子振りや空手の演武、ミュージシャンの演奏に合わせた地元の住民による歌などを披露
05/21	BRAHMAN Tour 1080°幡ヶ谷再生大学復興再生部ブースを全会場に出展
08/06	いわき・生木葉ファームでの農作業と勉強会　1回目
08/16～17	幡ヶ谷再生大学 復興再生部　SUMMER SONIC 2014東北復興 PROJECT「音遊海岸」にブース出展、大阪にも初出展
09/09	いわき・生木葉ファームでの農作業と勉強会（放射線基礎講座1回目）2回目
10/25	いわき・生木葉ファームでの農作業と勉強会　3回目
12/03	津波被害の大きかった閖上近くの仙台市東四郎丸小学校6年生の授業で「生きる」をテーマに特別講師として参加
12/13	いわき・生木葉ファームでの農作業と勉強会　（放射線基礎講座2回目）4回目
2015/03/11	幡ヶ谷再生大学映像記録「鼎の問」DVD発売
03/29	いわき・生木葉ファームでの農作業と勉強会　5回目
05/24	いわき・生木葉ファームでの農作業と勉強会　6回目
07/05	いわき・生木葉ファームでの農作業と勉強会　全7回
08/09	幡ヶ谷再生大学 公開講座　第1回目　@東京・渋谷
09/14	幡ヶ谷再生大学 公開講座　第2回目　@東京・芝浦
09/15・21～22	大雨被害にあった茨城県常総市にて浸水した民家の泥かきや家具の運び出し等のお手伝い・浸水した米農家さんと蕎麦屋さんの片付け、近隣のお宅の土嚢撤去、お墓の泥出しや掃除、自動車工場やご自宅の泥出しや片付けなど
10/03・04	ブルーベリー農家さんの畑とハウス内泥出し、整地、土嚢撤去など
11/01・03・07・08	Tシャツプリント工場にて浸水したTシャツの片付け、仕分け、洗濯など（Tシャツ再生大作戦の立ち上げ）

*主な活動履歴を掲載しています。幡ヶ谷再生大学webにて詳細がご覧に慣れます

HATAGAYA RE-BIRTH UNIVERSITY
STUDY WORKSHOP
幡ヶ谷再生大学の勉強会

福島県いわき市・生木葉ファームでの農作業と勉強会

私たちは震災直後から東北の沿岸部に入り、想いを行動に、現場の状況や現地の声に呼応した公園作りをはじめとした多様な活動を続けてきました。地元の方と一緒に現場で身体を動かし、語り、飯を食べ、笑い、時には泣いて、たくさんの仲間との繋がりが出来ました。人をつなぎ、想いを形に続けてきた活動は、あの原発事故以来、未だ収束の目途のない福島へとつながっていきました。

震災から3年以上経った今だからこそ、少しだけ冷静に、そして腰を据えて様々な事に向き合えるのではないかと考えます。

世間の風潮や感情に流されることなく思考し、判断出来るようになることが、これから先に踏み出す1歩につながることだと考えます。

現場での体験と併せ、基礎的な知識や情報を多面的・多角的に学ぶ場も設けていきます。

幡ヶ谷再生大学復興再生部、福島県での活動はじめます。

2014年8月6日

次の目標に向かって進んでいく支援活動団体であると感じました。

2011年の震災直後の6月から3ヶ月以上をかけ、のべ100人以上のボランティアスタッフと農地の除染を行った生木葉ファームの代表者である佐藤良治さん。幡ヶ谷再生大学をどのように見ていたのだろうか。

幡ヶ谷再生大学が来ることになったきっかけをお聞かせください。

ソニック（club SONIC iwaki）の三ケ田さんの奥さま（麻菜美さん）から、東北でも震災復興活動をしている「幡ヶ谷再生大学」という団体が、福島県でも支援したいので、という打診をされました。

「商品開発の指導を」といった依頼は今まであったのですが、幡再の依頼は「ここでお手伝いをさせてください」といったものでしたので、驚いたのを覚えています。

幡ヶ谷再生大学は2014年8月9日に初めて生木葉ファームを訪れましたが、前日の心境など覚えている範囲で教えて下さい。

参加予定人数が多いことや集合方法も現地集合と聞いていたので、無事にたどり着けるかが一番の心配でした。

初日の雰囲気、思い出深い光景や思い出があれば聞かせてください。

参加者が適正に合わせて各作業に分かれていたことに驚かされました。

また、幡ヶ谷再生大学の学長のブラフマンのトシロウさんとのお話で、活動の目的や方法、方針などに感銘を受けました。

その後、思い出に残っていることがあれば、お聞かせください。

食事に用いる農作物の放射能検査ですね。福島県内では販売用の農作物の放射能測定の検出限界値は10Bq/kgなのですが、福島高専の布施雅彦先生（冊子P7）の測定では0.3Bq/kgまで測定できるのでとても参考になり、先生にはその後も何度もお世話になっております。

毎回、食事のメニューや材料の調達など、ゆかりさんも麻菜美さんも大変だったことでしょうね。何の労いの言葉もかけずに、1年が過ぎてしまい反省しています。

初日のお話で、「現代人は野菜が足りない」というお話がありましたが、その特徴をお聞かせください。

まず「本当の野菜」についてですが、近年では遺伝子の組み換えや極度の品種改良（F1）が行われています。「在来種の良さを見直したい」と考えても、現在の栽培方法は農薬や化学肥料を使用した野菜が市場で主流を占めています。在来種の有機栽培こそ本当の野菜の味なんです。

野菜には人間の発育や健康維持に必要な多種の要素が含まれています。離乳食から幼少期に食品添加物などを含まない、健康な食物の摂取を心がけて欲しいですね。有機栽培野菜を食べさせ、野菜ぎらいにならない子どもを育てていって貰いたいです。

個人的に風評被害は当初よりは弱まっていると感じています。いまだ根強いものを感じますか？

だいぶ弱まってきたと思います。ただ、少数ではあるが放射能に対する拒否感を持っている方も散見（さんけん）されている。

毎回、幡ヶ谷再生大学の生徒たちが帰ったときに思うことはありますか？

解散後、生徒の方々が次回の再会を名残惜しそうに話をされている姿には、こちらも名残惜しい気分にさせられます。

最後の後片付けにはとても感心させられています。

印象的だった生徒の姿があればお聞かせください。

目標だった仕事が終わらないとき、とても気にした生徒さんが解散後も残って作業を完了させたことと被災地の石巻から参加して下さった生徒さんがいたこと。

幡ヶ谷再生大学の活動はどう思われましたか？

被災地の支援にだけ参加する活動ではなく、次の目標に向かって進んでいく支援活動団体であると感じました。

佐藤さんにとって幡ヶ谷再生大学とは？

幡ヶ谷再生大学は各学部が地道な活動を継続されています。ゆかりさんが「世界平和」と話されていましたがミュージックはそれを可能にすると思います。

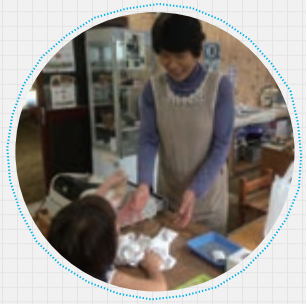
人は何かを求めています。それが何なのかを考えると「寺院も神社も教会もモスク」がなくても、ミュージックはその何かであり、幡ヶ谷再生大学もその手段に含まれているのではないでしょうか。

読者に一言お願いします。

震災から4年半が過ぎました。生木葉ファームは標高140m位なので津波被害はなく又地震被害もほとんどありませんでした。ただ原子力発電所の事故による被害が、このように長期にわたり県民はもとより、全世界、全国の人々に不安と不信を与えるとは思いませんでした。

これは放射能の人間に及ぼす影響を誰も知らないからだと思います。生木葉ファームは震災の平成23(2011)年、すべての農地の除染を行いました。今は震災前の農法（無農薬無化学肥料栽培）で営農を再開しています。

今後も安全な野菜を作りつづけていくつもりです。これまで、幡ヶ谷再生大学のみなさまを含めた多くのみなさんのご支援に感謝申し上げます。



震災後に何度も心が折れ、農業を辞めてしまいたいとも思いました…

佐藤良治さんの奥さまで、生木葉ファームの直売所の店頭ではいつも優しい笑顔で迎えてくれるイツ子さん。震災当時から現在までをふり返ってもらいました。

幡ヶ谷再生大学を知ることになったきっかけをお聞かせください。

生木葉ファームの直売所のお客さんだった三ケ田麻菜美さんの紹介で知りました。

幡ヶ谷再生大学は昨年の8月9日に初めて生木葉ファームに訪れたわけですが、前日の心境など覚えている範囲で教えてください。

参加人数の多さの対応の仕方、他県から来られる方の交通手段が心配でした。

初日の雰囲気、思い出深い光景や思い出があれば聞かせてください。

この集落にいると若い人の団体を見ることがないので、若い人の多さにびっくりしました。若い人たちから気さくに話しかけてもらい、気楽に対応できたので安心しました。

ブラフマンのトシロウさんのお話に感銘を受けました。

その後、思い出に残っていることがあれば、お聞かせください。

農作業だけでなく、午後からは放射能の話、被災者の話、福島第一原発作業員の実情、エネルギー確保など、勉強会も開催するので勉強になりました。

私は主に昼食の準備をさせてもらうのですが、食材の買い出しに始まり、大変な数の食事を時間内にこなせる手際の良さに毎回びっくりさせられています。

毎回、笑顔で迎え、笑顔で送り出している印象があります。どういった心持ちなのでしょうか。

また、逢えて嬉しいなぁ、来てくれてありがとう、という気持ちですね。それと、大変な仕事を手伝ってもらい「ありがとう」の感謝の気持ち。また次回も会いたいなぁ来て欲しいなぁと思う気持ち、ですかね。

個人的に風評被害は当初よりは弱まっていると感じています。いまだ根強いものを感じますか

全体的に弱まってきたと思いますが拒否感をもっている方もまだいるようですね…。

毎回、幡ヶ谷再生大学の生徒たちが帰ったときに思うことはありますか？

毎回、最後の後片付けが素晴らしいのに感心させられます。

夫婦で何日もかかる農作業が“あっという間”に終了するので、ありがたく思っています。また、次の仕事にとりかかる“やる気”にも繋がっています。

印象的だった生徒の姿があればお聞かせください。

ゆかりさんと麻菜美さんのコンビネーションですね。「アイデア・決断・行動力」に加え、そつのない応対の仕方が素晴らしいです。

被災地の石巻から来て下さったこともありますが、生徒のみなさまが大変だと言わずにニコニコしながら仕事に取りくんでくれたことが何よりも嬉しかったです。

幡ヶ谷再生大学の活動はどう思われましたか？

被災地の支援から始まり、次の目標に向かって進み、色々なことへの興味、関心をもち、自分のこととして向き合って考えていく団体に思えます。

佐藤さんにとって幡ヶ谷再生大学とは？

音楽を通して、心と気持ちが一つになれる場所。

読者に一言お願いします。

震災後に何度も心が折れ、農業を辞めてしまいたいとも思いました。そんな時、全国からボランティアの支援があり元気を頂くことができました。この震災で失うものもありましたが、暖かい心や人との繋がり、といった得るものも沢山ありました。

これからは恩返しの気持ちで頑張りたいと思っています。心が折れそうになった方、是非、生木葉ファームに遊びに来て下さい。「そんな生木葉ファームになったら良いなぁー」と思っています。幡ヶ谷再生大学のみなさま、本当にありがとうございました。

HATAGAYA RE-BIRTH UNIVERSITY
STUDY WORKSHOP
幡ヶ谷再生大学の勉強会

福島参加表明に記された「世間の風潮や感情に流されることなく思考し、判断できるように」を実践するため、活動の日の午後からは「勉強会」と題してゲストを招き、お話を聞きディスカッションを行いました。

講師として参加していただいた4人の方の後日インタビューです。

「江戸時代の人は不幸だったのか」と。

武樋 孝幸（たけひ たかゆき）

2012年「武樋総合ライフスタイル研究所」創設
2014年 日本大学を退職
同年　　西会津奥川に移転、「武樋総合研究所」に改名
2015年「株式会社 三神峯商会」事業化

「ローカルに暮らし、グローバルに稼ぐ」ライフスタイルを提唱している武樋孝幸先生に実践しているオフグリッド生活について具体的なお話をして頂きました。

幡ヶ谷再生大学に招かれたきっかけをお聞かせください。

当時設置中だった猪苗代湖の野外音楽堂のエネルギーシステムについて相談を受けたとき、相談の場として参加させていただいたと懇親会でゆかりさんに出会いました。その場の会話の中で講演を依頼されたのですが、最初は迷いました。幡再のことをネットで調べ、私が目指す「すべての人が信念に従ってやりたいことにチャレンジできれば世の中は変わる」に通じるところがあると感じてぜひ引き受けたいなと思いました。

講演、前日の心境など教えてください。

電力自立の生活を紹介することがテーマだったのですが、なぜ電力自立なのか、それは何に結びつくのか、他のことに優先してそれに取り組む理由は、など、話題をいろいろ考えました。何度も参加している場だとしたら求めるものも想像がつくのですが、ほとんど全員が初めて合う人たち。何から何を何処まで話そうか、手さぐりしながらの講演になってしまいました。

日本大学の教員をされていたとお聞きしましたが、安定した職業を辞してまで開設された「武樋総合研究所」は、先生にとってどういった存在なのでしょうか。

私が目指す「世の中の発展を促進するために、変化を促進する」を実現するための会社です。原発だけでなく多くの社会問題がありますが、それらに共通して言えることは「何かを変えなければいけない」ということだと思います。そのために必要なことは、できるだけ多くの人が新しいことにチャレンジすること。そこから生まれる、ときに小さく、ときに大きな良きものが少しずつ世の中を変える、と思います。

豊かな人生とはどんな人生か、私は、自由時間が多い人生だと考えています。では、自由時間を最大にするにはどうすればいいか。私は、自然の恵みを活かした生活がその答えの一つだと考えています。「ローカルに暮らし、グローバルに稼ぐライフスタイル」と私は名付けていまして、地域の自然・人・文化に沿って最低限の生活を確保しつつ、特技を活かして短時間集中で現金収入を得る、そんなライフスタイルのモデルです。

このライフスタイル推進のための各種事業を進める母体が武樋総合研究所です。「奥川の修理屋さん」や「雑多な技術者の団らん～雑技団～」などが事業内容です。

講演のなかで「自給自足で電気を作れば電気料金は5Aで大丈夫」といった説明がありました。それに気づいた経緯を聞かせてください。

私は大学での研究者時代に、再生可能エネルギーのみで冷暖房を自給できる「エネルギー自立住宅」の研究を進めていました。エネルギーシステムを一から設計し、製作を現場で指導しながら完成させました。ところが、そこに住んでみると不便が多い。晴天に恵まれない、風が吹かない、1,2日は大丈夫ですが、3,4日となると難しい。お金をかけてパネルとバッテリーを増やせば可能ですが、一般住宅の敷地を考えると無制限に増やすわけにも行かない。では、システムの高効率化を、なんて研究していました。そうしている間に起きたのが震災でした。こんなときに役に立てなくて「何の研究か」と駆け回りました。いや、最初は駆け回ることすらできませんでした。大学での研究の時間を犠牲にするようにして、ようやく駆け回れるようになりました。

大学での研究のテーマである「エネルギー自立住宅」。実際建てるにはかなり高価です。6畳一間の実験用一戸建てで2千万円、2百万円ではありません。誰が買うと言うのでしょう。すべての家・工場でエネルギー自立が達成できれば原発も何も要らなくなりますが、現実的な方法ではありません。と、ここで別の話が関わって来ます。福島県内の大学で、福島県に住んでいるので当然考えるわけです「豊かな生活のために原発は必要なのか」と。不便になるぞ、と人は言います。

そこで気になって、試してみました「江戸時代の人は不幸だったのか」と。日の出とともに起きて、歩いて大学に通って、調理は毎日炭火、夜はロウソク。けっこう楽しかったですよ。モノが無くても楽しい人生は送れる。

また、別の出来事もきっかけになりました。この頃に電力自立セットの導入を検討していました。そこで東北電力の料金プランを見ていて気がついたのです。各電力契約プランには「従量電灯」という名前が付いているのです。「電灯の使用量に従って課金される」とでも言いましょうか。つまり昔は、電気と言えば、大切な用途は電灯だったということです。

そこで思い浮かんだのは憲法でうたわれている「健康で文化的な生活」、そこには当然、照明（電灯）は含まれるであろう。人間の活動時間を1.5倍に増やしてくれる照明。それに、食を保障する冷蔵庫も含まれてよいのではなかろうか。あとは、情報源たるテレビ・電話・インターネット。ここまでは公共の福祉に含まれるのではなかろうか。計算してみると、全部合わせても最大5A程度で済む。東京電力には従量電灯Aという5Aの設定が無いのが残念ですが、その他の地域ではたいていあるようです。しかも、最初の7kWhまでは無料なのです、この限度値は地域により違うようですが。

これこそ、国民の最低限の生活を保障するものだと感じました。それ以上の電力を使うなとは言わない、ただし、それは贅沢品だから自分で高い金を出して再生可能エネルギーで賄いなさい、このような提案が成り立ち得るのです。

さらに、これをベースに計算すると、東北電力管内ですべての家庭で従量電灯Aとすると、管内すべての原発が削減できる。お、これは、と思って東京電力管内で調べると同様に管内すべての原発の削減につながるとわかったのです。これが実現すれば、「契約者に安定した電力を供給し続けるために原発は必要」との理由は成り立たなくなるのです。

真のロハスを提唱されていましたが、それに気づいた経緯も教えてください。

ロハスの意味に立ち返ったから、です。ロハスとは、英語でLOHAS 、略さずに書くと「Lifestyles of Health and Sustainability」、直訳すれば「健康で持続可能なライフスタイル」です。Healthは健康、体の健康だけでなく精神の健康も含める、とも言えます。Sustainabilityは持続可能性ですが、もともとは経済成長の持続性のために使われていた言葉でした。これを自然や地球環境の持続可能性も含める、とすればより良い方向へとつながるでしょう。最後に、重要なのがLifestyles。日本語でライフスタイルと言うと日々のライフスタイルをイメージしがちですが、lifeには「人生」という意味もあります。「人生に対する姿勢」と考えると、軽率には扱えません。そして、そのライフスタイルに複数形の「s」が付いている。健康で持続可能なライフスタイルには様々あるのです、決して答えは一つではない。LOHASという言葉を考えた人は、これだけの想いを込めてこの言葉を作ったのです。受け止められたのであれば、自分に向かって問いかけずにはいられないはず「あなたはどんな姿勢で人生に向き合い、どんな人生を目指していますか。その答えは数多く有るはず、あなただけのライフスタイルは何ですか」と。

講演をした直後の感想をお聞かせください。

うまく行かなかったなあ、というのが感想でした。自己紹介の時間を長めにして、何のために電力自立の生活をしているのか、何を目指しているのか伝わるようにと思ったのですが、残念ながらうまく行きませんでした。けれども、技術の方での質問が多くあり、それによって普段思っている疑問の一つでも解決されたのなら私としては嬉しい限りです。

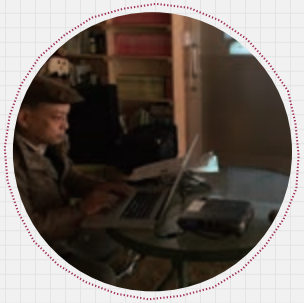
幡ヶ谷再生大学の活動はどう思われましたか？

都市から出ずにとどまっていないで、世の中の多くを自分自身で体験し、現地に出向いて直接会って話して一緒に考えようとする人たちだなと思いました。このような活動に参加する人がもっと増えると、震災や原発事故の問題の解決も早まるだろうに、とも思いました。

読者に一言お願いします。

幡ヶ谷再生大学の人間復興により、お金でなく、物でもなく、人間中心の世の中になることを期待しています！

未来の、次への災害へのタスキを渡せるとよい。



布施 雅彦（ふせ まさひこ）

独立行政法人
国立高専機構 福島工業高等専門学校
一般教科情報 准教授 博士（学術）

放射線に関する基礎的な知識を学び、福島やいわきの現状を知るために布施雅彦先生をお招きし、講義をしていただきました。

幡ヶ谷再生大学に招かれたきっかけをお聞かせください。

三ヶ田さん（いわきclub SONIC iwaki）の紹介です。

講演、前日の心境など教えてください。

ゆかりさんから事前に冊子等を頂き、とても面白い団体だと感じていました。

現在は多少薄れつつありますが、風評被害となっている放射線の影響はあるのですか？

放射線の健康被害への影響はわからない。

わからない、ですか…。

放射線は事故前（2011年）より確実に増えています。それが健康被害には及ばない、または過去のレベルに埋もれてしまう部分が多く、影響は見えない、わからない、判別つかない、と思われます。　原発事故の放射線の影響による健康被害を、科学的や統計学的に立証することはかなり困難な作業になってしまいます。

講演の中で「いわき市の農作物を使って研究すると、人体に影響を及ぼす物質はほとんど消えている」とあり、「数値で表すと0.00000・・といった天文学的な数字しか出ませんでした」とありました。

実際の研究結果です。

勉強会をした直後の感想をお聞かせください。

遠くからいわきに来て、農作業を行い、大変疲れているなかで、日頃触れることもない放射線等の内容でとても眠くなるなかで、しっかりと学びたいという姿勢に、感動しました。

幡ヶ谷再生大学の活動はどう思われましたか？

とても素晴らしいと感じております。また、活動をありがたく感じています。末長く継続して、未来の、次への災害へのタスキを渡せるとよいと思います。

読者に一言お願い致します。

今回の震災で一般的な組織の壁を越えた集まりができ、素晴らしいと感じております。

（福島県）双葉郡の復興には数多くの険しい道があります。福島を忘れずに末長くおつきあいいただければと思います。

前向きにこの現実を受け止めていければ、我々の犠牲も少しは報われるのでは…

遠藤 あつし（えんどう あつし）
福島第一原発作業員

福島第一原発で働かれている遠藤あつしさん。原発内での状況や労働環境などを、勉強会でお話くださいました。

幡ヶ谷再生大学に招かれたきっかけをお聞かせください。

震災後BRAHMANと親交ができ、ゆかりさんからお誘いを受け参加しました。

講演、前日の心境など教えて下さい。

上手く気持ちを伝えることが出来るのか、本当に皆が自分の話しに興味を持ってくれているのかなど、不安もありましたが、緊張の方が大きかったかもしれません。

幡ヶ谷再生大学の講演ではどのような話をされたのでしょうか？

主に原発内部の実状、働く上での困難、心境などをザックリと。あとはあまりメディアには出ないような内部の細かい状況やなどは質問に応じて応えるような形で話をさせて頂きました。

福島第一原発で働くきっかけを教えて下さい。

震災後、従業員含め避難により実家の工場がストップしてしまいましたので、一ヶ月ほど避難生活を送るなかで渡辺社長からの誘いを受けて震災復旧の手伝いを始め、そのなかで原発収束作業というものにも従事するようになりました。

故郷を奪われる、という現代では考えられない事態が実際日本で起こっている現状をどのように思われていますか。

当時の喧騒（けんそう）からすれば落ち着いてしまったように感じるこの生活ですが、世界規模で見ても生活圏がうばわれる事象というのは稀なことだと思います。

その当事者に自分がなるとは思っていなかったし、普通はそんなことはあり得ないので考える必要などなかったと思います。しかし、事実起こってしまったことにより可能性というものは「0」ではないと世界の人達が認識したはずです。

世界中にある核施設の全てがこの範疇（はんちゅう）に該当するということは、全世界が保有するリスクと共有すべき意識だと思います。同じ過ちを繰り返さないためにも、同じ悲しみを生み出さないためにも、日本から世界に発信できる現実というものをもっと伝えていけるきっかけとして、前向きにこの現実を受け止めていければ我々の犠牲も少しは報われるのではと考えます。

講演をした直後の感想をお聞かせください。

実状とか色々伝わったかな？もっと聞きたいことはないかな？

真剣な目で話を聞いて頂いたので、こちらも緊張しました（笑）

印象的だった生徒の姿があればお聞かせください。

愛知県など遠方の方からわざわざ参加して頂くなど、真剣に問題に関心を持ってくれていれる方々が居てくれた事に驚きと感謝でした。

幡ヶ谷再生大学の活動はどう思われましたか？

大人から子どもまで参加して楽しめるような活動など、和気あいあいとした雰囲気に包まれているし、皆が真剣な想いと眼差しを持って活動していることがひしひしと感じられるので、素晴らしいと思いました。

読者に一言お願いします。

福島の真実や原発の真実など、まだまだ公開されていないことや、疑問に思うこと、知りたいことなどがあれば気兼ねなく質問して頂きたいです。私も知っていることはもっと伝えていきたいので。

遠藤さんにとって幡ヶ谷再生大学とは

復興に努めて来た自分たちの活動や作業などに対して並々ならぬ応援、声援を頂けることで、作業に対するやりがいや意義を再認識させて頂きました。非常にありがたい気持ちでいっぱいです。

自分にとっては応援団がついていてくれるような気持ちですね。そんな存在でしょうか。

今はゼロから立て直すという気持ちしかないです。

平山"two"勉（ひらやま つとむ）
富岡町出身。インディーズレーベル「ノーマディックレコード」代表、「有限会社ホテルひさご」代表、「富岡インサイド」編集「相双ボランティア」主宰、「双葉郡未来会議」代表など。

原発事故により避難を余儀なくされた旧警戒区域富岡町。
住民でないとわからない震災直後から現在の状況を、想いとともにお話し頂きました。

幡ヶ谷再生大学に招かれたきっかけをお聞かせください。

きっかけは相双ボランティアのときですかね。

講演、前日の心境など教えてください。

じつは幡再は石巻でのことなど何となく聞いていた程度で、それまでほとんど縁がなく、あまり予備知識はありませんでした。生木葉に来る人はソニック界隈の人が多いようだったし、とくにかまえる感じはなく、講演などで話す内容はいつもほとんどアドリブなので普段通りに話そうと。

勉強会で、「3月12日の車の避難渋滞写真」をみせた平山さんが言葉を詰まらせていた、と生徒からお聞きしましたがその辺りの心境をお聞かせください。

じつは言葉を詰まらせたのは何度かあって…。そこもやっぱり当時の焦り、恐怖、やるせなさ、無力感など、色々な思いが脳裏に蘇ってきたからかな…。

人前であらためて話すと、そのことに集中して時々抑えきれなくなっちゃうんですよ。それは写真とか文章とかだけでもなる時があります。ドキドキしてきたり、何かが迫ってくる感じがしたり…。

ちょっとしたPTSDですかね…。

また、「自分たちの母校は事実上廃校です」ともお聞きしました。その無念さを思いつく範囲で結構ですので、お聞かせください。

沢山の思い出が詰まった母校なので、残念としか言いようがないです。学校もそうだけど、当面は住民票の上ではいるけど、この町で生まれる子どもがいないという現実の中で、それでもいつの日か現地で学校が再開することを願っています。

将来、震災以降初めて富岡で誰かの子どもが生まれたら、その子どもの前で泣くでしょうね。思いっきり抱きしめてやりたい。

それは30年後かもしれないけど。

「故郷を奪われる」という現代では考えられない事態が実際日本で起こっている現状をどのように思われていますか。

震災当初は「故郷を奪われる」という感覚も少なからずあったけど、あれから色んなことがわかってきて、色んなことを学んで、富岡に関してはその感覚はなくなりました。色々なモノを積みかさねてきた高齢者の方のほうがその感覚が強いかもしれません。

自分に関して言えば、今はゼロから立て直すという気持ちしかないです。それが可能だとわかったから。でも帰還困難区域に関しては、帰れない人が多いわけだから「奪われた」ことになるでしょうね。とくに大熊、双葉の中間貯蔵施設予定地に住んでいた方は。

その無念さは自分なんかとは比較にならないわけで。でも話してみると結構割り切っている方も多いんですよね。逆に居住制限区域の宙ぶらりんな感じは長い戦いになるだろうから、どこかで踏ん切りをつけないと前に進めないですね。

起ったことはもうしょうがないとして、帰る人も帰らない人もみな、安心、安定した生活を送れるようになることを願っています。

講演をした直後の感想をお聞かせください。

限られた時間の中では出し切ったかな、と。自分の話したことや気持ちがどれくらい伝わったかわからないけど、暗い気持ちになってほしくないなあと思いました…（苦笑）。

印象的だった生徒の姿があればお聞かせください。

もらい泣きしていた方とか…。

幡ヶ谷再生大学の活動はどう思われましたか？

素晴らしいです。参加した人が何かを考え、行動するきっかけになってほしい。そこに参加するだけでなく、自らアクションを起こす人が出てきたらもっと素晴らしい。

遠くて近い、近くて遠いお隣さん。かな（笑）

遠くて近い、近くて遠いお隣さん。かな（笑）

読者に一言お願い致します。

前途した通り、震災直後の絶望や葛藤はなくなりました。帰還困難区域なんかは確かに「死の町」としてどんどん荒廃していっているけど、それでも約4年半が経って、線量は何もしなくても3分の1以下には下がってきています。

6国や常磐道も開通し、町内では人も車も少しずつ見かけるようになった。電気も水道も少しずつ復旧し始めている。今は、時間はかかってもこの地域は何とかなるんじゃないか、って思えるんですよ。

そんな環境で戦っているヤツがいる、ってことを頭の片隅にでもおいてもらえれば充分です。

あと福島と言っても、もの凄く広くて地域によって全く状況が違うので、何かにつけて「福島」と一括りにして話す人いますけど、そういうのイヤですね。「福島は云々～」なんて、デカイことを言っているヤツは大抵知ったかぶりの偽善者です（笑）！

問題の本丸である相双地区のことなんてほとんど知らないでしょう。近づきたくないですね。

HATAGAYA RE-BIRTH UNIVERSITY
STUDENT'S VOICE
幡ヶ谷再生大学生徒の声

2015年7月5日、参加者全員で生木葉ファームでの活動の一年間をふり返り意見を出し合いました。その後、多数のメールを頂きました。

そのなかで印象に残った生徒たちにインタビューを行いましたので掲載します。

「結果に向かってこうしなきゃいけない」ってのがなくていいですよね。

ヒデキ（内郷げんこつ会）

内郷げんこつ会・ギター担当のヒデキさん。2011年から幡ヶ谷再生大学の様々な活動に参加。当時のことや思いを福島に住む一人の目線で語ってもらいました。

幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけをお聞かせください。

幡ヶ谷再生大学の名前だけは随分前から知っていました。誰かは忘れましたけど、BRAHMANのメンバーがTシャツを着ていて「何それ？」って。それから数年後に震災があって、すぐにBRAHMANが幡ヶ谷再生大学○○キャンパスっていうライブを被災した県でやって、その辺りから頻繁にその名を見るようになってきましたよね。で、現在のような形になっていった。

生木葉ファームの存在は知っていましたか？

正直なところ全然知りませんでした。地元と言えば地元なんですけどね（笑）

海沿いの小渕浜の活動を経験された上でお聞きしますが、山間部の生木葉での活動に違いはありましたか？

小渕浜は津波が来た地域ですし、爪跡も残っていますから震災の影響が目に見えるんですが、生木葉さんは震災の影響は目に見えないんですよね。

どちらかといえば原発事故の影響で。

でも、僕たちが生木葉さんに通う頃には、土を入れ換えたりした後でその影響もないと言ってもいいくらいで。影響と言えば風評という部分でしょうか。だから内容は違いましたね。小渕は公園作り、生木葉ファームでは理解と払拭へのきっかけといったところでしょうか。

印象に残った雰囲気や思い出深い光景があれば聞かせて下さい。

僕がそう感じただけなのかもしれないけど、最初は少しピリピリした雰囲気があったんです。やはり福島の農作物という部分や、福島での土いじりという部分での不安も少しはあったでしょう。それが回を重ねることによって雰囲気も柔らかくなっていきましたし、遊んでいる子供が毎回増えていくんですよね。

押し付けではなく、それぞれがそれぞれの理解をしていったのかなぁと感じたんです。そういうのは嬉しかったですね。

印象的だった参加者の姿があれば、お聞かせください。

ORANGE RANGEのYOHが　沖縄からわざわざ来て驚きましたね。その前にも小渕に来て、2週間後にいわきですからね。その他にもみんな遠くから来てくれているんですよね。

個人的に風評被害は当初よりは弱まっていると感じています。いまだ根強いものを感じますか。

弱まっていると僕も思います。でも根強いものはありますよね。完全に無くすのは難しいとは思いますよ。駄目だと思う人は駄目だという情報しか受け付けないですもんね。

2011・3・11直後のいわき市の様子を教えてください。

「原発が危ないらしい」って情報があって、市内から離れる動きが凄かったです。昼はもちろん人は少なかったし、夜になると信号以外はほとんど消えていて真っ暗で。

30キロ圏という丸いくくりの中にいわき市の一部がかかっていたせいで、商品も支援物資も入って来なくて。最初はみんなから連絡が来ても「大丈夫！」って強がっていたんですけど、時間が経ってくると現実が見えてきて…。

たとえば、すぐに動けない在宅避難の人はどうなるんだ？とか

津波で被災した避難所の人は？とか

スーパーに並ぶことができない人は？とか、色々考えてたらどんどん怖くなって。

さすがに「無理かも」って思ってTOSHI-LOWと 光舟（THE BACK HORN）に「助けてくれ」って電話して。

故郷を奪われる、という現代では考えられない事態が実際日本で起こっている現状をどのように思われますか。

「道路が通る」からとか「ダムができるから」とかで立ち退く場合はあったと思うんですよ。誰か（少数）が誰か（多数）の為になるってのは。でも、町ごと奪われるってのは…ねえ。

同じ誰か（少数）が誰か（多数）の為にってことなのかな。数というか力。地域格差というのを見せ付けられた気がします。

2011年以降、幡ヶ谷再生大学の活動にほとんど力を貸して頂いているのですが、どんな4年間ですか？

力を貸しているってことはないです。逆に4年間学ばせてもらっていると思っています。でも決して優等生ではないですよね、4年経っても1年生って感じでね。元がクズなんで（笑）

幡ヶ谷再生大学の活動はどう思われましたか？

「結果に向かってこうしなきゃいけない」ってのがなくていいですよね。表向きはあるのかもしれないけど、実際は自分に対してというか、自分の復興。それぞれの復興再生部なんでしょうね。

あなたにとって幡ヶ谷再生大学とは？

今では日常というか…居場所なんですかね（笑）

「悲しい」と言うと、「わかったようなこと言うな！」とも思うし…

三浦 望

福島県に住む三浦望さんは、福島県民ならではの“目線”でお話頂きました。

幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけをお聞かせください。

東北ライブハウス大作戦がらみだったと思いますが、いつからかTwitterのタイムラインに上がってくるようになって、昨年（2014年）2月のSTEP in FUKUSHIMAで幡ヶ谷再生大学の冊子を頂いたのが、きっかけだと思います。

幡ヶ谷再生大学の活動は生木葉ファームが初めてですか？

そうですね。

生木葉でのほとんどの活動に参加しているようですが、印象に残った雰囲気や思い出深い光景があれば聞かせてください。

前回自分たちが植えた種が次回来たときに生育していることや、草むしりしたところが1ヵ月後にまた同じようになっていること、は印象に残っています。

子どもたちが虫採りしたり、ケンカしながらもすぐ仲直りして遊んでいたり、その後「お腹がすいた～」と誰よりも早くご飯の列に並んだりすることが思い出に残っています。

メールの中で「勉強会」のことが綴られていましたが、実生活に活かせそうですか？また、印象に強かった勉強会を教えてください。

ノマディック平山さん（冊子P9）の帰還困難区域内のお話が印象的でした。実生活にも活かせるかどうか改めて聞かれると…どうですかね…。毎日テレビでは天気予報のあとに線量の数値は出てきますし、作業員の方のお話も実際は郡山やいわきでさえ50キロ以上離れている所なので環境も全然ちがうし、実生活では感じられないからこそ勉強になるような気がします。

オフグリッドも普段の生活からはちょっと考えにくいほど専門的だった気がしました（笑）。でもソーラーパネル1枚でケイタイの充電ができる！とかは活かせそうです。実際フェスに行く時とかはソーラー型充電器なら便利ですし。幡再のブースにソーラーパネル置いて充電できるようにするのも体験型でいいのかも？屋外フェスに限られますが。

個人的に風評被害は当初よりは弱まっていると感じています。いまだ根強いものを感じますか。

弱まっているとは思います。

ただ、震災から2年後にペンションを経営していた友人が自殺したことを考えると、ですが、2年経っても客足が戻らなかったと聞いていましたし、場所が裏磐梯でしたので、距離とか地域とか関係なく"福島"というだけで広範囲に被害があったものと思います。

そこから考えれば弱まったのかな、と思います。農家の方やご商売されている方はまだ苦しまれているかもしれませんが…。

故郷を奪われる、という現代では考えられない事態が実際日本で起こっている現状をどのように思われますか。

被害に遭っていない自分が言うのはちょっと違う気もしますが、家や仕事だけではなく、生まれ育った空気や景色、たくさんの思い出がある学校なども入れなくなってしまっているのが…。うまく言えません…。「悲しい」と言うと、「わかったようなこと言うな！」とも思うし…。

同じ県内だからこそ、表現が難しいです…。

印象的だった参加者の姿があればお聞かせください。

県外や県内でも会津の方からだと茨城より遠いかもしれないので、遠くから来てくださるみなさん　沖縄から来て下さるYOHさん！

小渕浜にも行かれたそうですが、雰囲気はいかがでしたか？

ご近所の方も笑顔でご挨拶してくださったり、着いてすぐ牡蠣とかクジラとか振る舞っていただいたり、地域の方のやわらかさが感じられました。作業自体は、生木葉さんで鍛えられた分かなり順調に進みました！

公園の近くはすぐ海で、作業中に来た地震はやはり怖かったです。小渕浜のわかめのスープが美味しすぎました。

幡ヶ谷再生大学の活動はどう思われましたか？

純粋に、いつも楽しいです。雪の日の自主練も、炎天下の暑い夏の日も、みんな笑顔で楽しく作業しています。幡再に参加してからいろんな人と繋がる、というのももちろんありますが、実はそれ以前から同じライブに行っていたという人がホントに多いです。

ライブハウスで共にしていた時間が、幡再で繋がって、またライブで会える。繋がる人って必然なんだなと思わせてくれます。また、幡再の活動には子供たちもたくさん参加していますので、生木葉さんで思い出が作れるのはやっぱり素晴らしいことだなと。

あなたにとって幡ヶ谷再生大学とは？

少しでも気にする、考える、想う、感じる、伝える、から行動することに繋がり、少し繋がっていた縁を強く繋ぎ合わせてくれるところ。

同志が集うところ。

集う場所を創るところ。

人として何が大切なのか？は自分で考えて選択して欲しいなと思います。

東小川 尚美

お子さんと参加された東小川 尚美さん。幡ヶ谷再生大学の活動を通して彼女に起こった心と行動の変化とは。

幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけをお聞かせください。

小渕浜で公園作りをしているのをTwitterで知りました。楽しそうだな、と思っていました。実際に幡再の活動の話を聞いたのは、いわきソニックにライブを見に行ったときに（2014年2月 STEP in FUKUSHIMA）ゆかりさんが紹介されてステージ上で話しているときでした。

生木葉の雰囲気、思い出深い光景や思い出があれば聞かせてください。

雰囲気はライブ会場みたいです。自分の好きなバンドを好きな人がいっぱいいる。思い出深い光景は、初めて生木葉さんに行ったとき、初めて会った子どもと自分の子どもがずっと一緒に遊んでいたこと。最初は恥ずかしくて話せなかったのに、きっかけができたら、皆が帰ってからもずっとケラケラ笑って遊んでいたことですね。

何もない場所なのに、レンガを基地にしてごっこ遊びしていたり。雨樋に水を流して「流しそうめんだー」と笑っていたり。薄暗くなってきていても気にせず、笑って、汗だくで、本来の子どもの姿ってこうだよなと再認識した光景でした。

自分も子どもの頃、近所の子と暗くなるまで遊んでいたことが蘇りました。

メールの中で「幡ヶ谷再生大学は一人一人考えたことを行動している」とありましたが、具体的に教えて貰えますか。

気付いたことを実行している感じです。誰かに何か言われたからそれをやるのではなく、自分で思いついたこと、気づいたことをしている。たとえば、帰っていく人がいる中、灰皿を片付けている人がいたり、テーブルを出したり片付けたりすることも、必要だと感じた人が自発的に動いている。

何をしたらいいかわからないような人には、ちょっと休憩してくるからこれ代わって、とか。人それぞれ気づくポイントが違い、実際に自分もあーそれ気づかなかったけど、必要なことだよね！と思うことが沢山ありました。

どうしていいかわからないことも、他の人のしていることを見てこうすればいいのか、など。何すればいいですか？と聞けば私もよくわからないんだけど、多分こんな感じで、みたいな所からお互いの意見を伝えあって、じゃあこうしましょうと決まったりしていました。「ジャガイモが2種類あるからカゴは別にした方がいいよね」と自然と誰かが言うし、重いものは男の人が率先して手を貸してくれる。その場所で足りない必要なことを、それを得意とする人が埋めていく。役わり分担が自然と出来る。そんな印象が私にはあります。

実生活でも生かされそうですか？

幡再に行く前と今ではだいぶ変わりました。私は普段工場で働いています。職場では言われたことだけやればいいという人が多数で、そんなことまでやったって貰える給料は一緒だとか、口を開けばそんな会話ばかりの場所です。そのことに対して私もそう思う部分はあるけれども、そればかりじゃない違和感が常にあって、幡再に行くようになり感じていた違和感の正体がわかりました。

自分で考えて自らが動くことが出来ていないのだと。

そのことにすら気づいてないとも感じました。自分の人生の大半の時間を費やしている仕事の時間、一番身近なその環境を良くしようと考えるようになりました。 これがこうだったらいいのにと思うことを実際口にして伝えてみると、周りの人は気づいていないことで、でも言ったことは共感してくれて、みたいなことがありました。幡再の活動を通して人に伝えることの大切さを学びました。

今までは自分の意見を言うことが苦手で、思ってもいないことに同調していた部分が自分の中ですごく変わりました。相手に合わせなくても、自分が気づいていることを相手は気づいていないのではないか、と思えるようになり、自分のしたいこと、思っていることを言うことができるようになりました。

また、無関心だったニュースにも耳を傾けるようになりました。関係ないと感じていたことを自分に置き換えて考えられるようにもなりました。自分一人が声をあげても何も変わらないと思っていましたが、「今は変わらないかもしれないけど…」言えるようになりました。

そんな心境の変化になりました。今は伝えることの大切さは実感しています。

故郷を奪われる、という現代では考えられない事態が実際日本で起こっている現状をどのように思われますか。

信じられない。だけど、私の住む隣の県で実際に起こっていること。6国が開通したばかりのころ南相馬で行われるフェスに行くのに通ったとき、人の気配がない街の異様な光景は忘れられません。

自分の日常にあった当たり前のことが当たり前じゃない。道路を車で走っていてトイレに行きたくてコンビニに寄ろうとする。看板を見つけ入ろうとするとそこにはバリケードがされている。ガソリンを入れたくてスタンドを探して入ろうとしてもバリケードがされている。そんな光景を何軒も何度も見ました。肌で感じたリアルな現実がありました。

誰かの生活した跡が見えるのに人の気配がしない。何とも言えませんでした。大人になって自分の子どもの頃に行った場所、住んだ場所、好きだった風景。改めて訪れると蘇る記憶。それは自分が何者か知る大切なことだと思います。自分のルーツを探しに来たときにあと一つでピースが揃いそうなパズルの肝心な部分が抜け落ちる、そういう感覚になるんじゃないかと思うと、奪っていいものなんか一つもない。そんな気になります。自然の変化はしかたない、けど、人の手で壊しちゃいけない。自分が故郷を奪われる立場にたったら、と思うと何ともいえない怒りと、悲しみと…どうしていいかわからないです。自分自身を否定されたような…そんな感覚になるような気がします。

メールの中で「公園でDSしている子にしたくない」「ここに来れば信頼できる人がいる」とありましたが、具体的に聞かせてください。

本来の子どもとしての姿はどんな姿かと考えたときに思ったことです。与えられたものがなくても創意工夫で何でも遊び道具になる。DSが悪いわけじゃないけど、今しかできないことがもっとあるでしょ、と思う。でもそれって与えている大人に責任があるのかなと思う部分もあります…。大人自身がもっと考えなくちゃいけないのかな、とよく反省します。

子どもがいるので自分が意図しない集団に入らざるを得ないことが多いなか表面状の会話だけで、本音がわからない人付き合いに疲れます。幡再に来ると、この先どうしていかなくちゃいけないか、答えをくれるわけじゃないけど、考えなくちゃいけないことを提示してくれる。そのことによって考え、答えが出る。

考えた先は人それぞれですけど、考えるきっかけになった根っこは皆一緒なんですよね。だから人として信用できるし、辛いことを一緒に乗り越えるから信頼できる。そんな大好きな大人がいっぱいいます。

お子さまがいらっしゃるとメールの文中にあり、また「正しさ」という言葉もありました。一人の子どもの親として「正しさ」をしっかり伝えていきたい考えですか？

人として何が大切なのか？は自分で考えて選択していって欲しいなと思います。正しいことは人それぞれで、目的がちがえば正しさも変わると思うので、うわべではなく物事の本質を自分で見極めて、生きていって欲しいと思います。

印象的だった参加者の姿があればお聞かせください。

みんな自分の得意なことを活かしているんじゃないかな、と思います。私は黙々と作業しちゃうんですけど、声かけるのが上手な人がいたり、教えるのが上手な人がいたり、自分にはないものをみなさん持っているので、見ていて楽しいです。あと子供たちはみんな楽しそうですね。子連れの方は地元からの参加者が多くて、知らない子たちばかりでしが、朝はぎこちなかった関係が、いつの間にか仲良くなっていて、育った場所とか環境とかみんな違うのに同じように遊べて嬉しかったです。

どんな子どもでも「壁」を作らずに“他人”と接する姿を見ていると、私自身もいつから「壁」を作るようになったんだろう、「それが大人」といえばそれも少し違うしな…と思いますね。子どもたちが無邪気に遊ぶ光景はいつの時代も変わらないであり続けてほしい。そう思います。

幡ヶ谷再生大学の活動はどう思われましたか？

すごいなと。 自分が同じようなことをしようと思ったらまずどうしていいかわからない。一人一人の想いで成り立っていると感じます。活動に参加するたびに再認識させられることですけど、誰かに何か言われることに慣れていて、言われなきゃ動けない自分を痛感します。誰かにしてもらうんじゃない、自分たちがしていかなくちゃいけない世代になっていることを、大人なのに自覚できていないなと。

社会との結びつきなんて自分には関係ないと思っていました。社会がどうなろうが関係ないとも思っていました。子どもができて、社会に接することが増え、どうでもいいと思っていたことが実は大切なことで、それを変えるのも守るのも自分たちが担っている。そう思うと残されていく子どもたちの為に少しでもより良い社会を残してあげたいと思うようになり、そういった活動をされている幡再に出会えたことは自分のなかですごく大きいです。知らなくても今までの生活が変わるわけではないけれども、知った今の方が楽しい。人として成長できる場です。それを生み出していることがすごいと思います。

あなたにとって幡ヶ谷再生大学とは？

自分自身を問う場。自分がどうしたいか、どうなりたいか、どう生きたいかを考えた場所です。自分の記憶を辿り、何が好きで何が嫌で、誰も見てないから分からないと思春期に手を抜くことを覚え始め、そこからは頑張ることをやめて大人になり、心に穴が開いたままの毎日。何かが足りないけど、何が足りないか分からない。

震災に遭い、東北3県と比べたら比にならないくらいの被害でしたけど、それでも1週間ほど水も電気もない生活を体験しました。当たり前が当たり前ではなくなった瞬間。自分死ぬな、と脳裏をよぎりながらグニャグニャ揺れる道路を車で運転しながら逃げていたときに「自分は本当に死ぬんじゃないか」と考えていました。保育園に預けていた当時2歳だった子どもも「死んでいるな」と本気で思いました。余震に怯えいつ死ぬかわからない恐怖と隣合わせの日々。そんな日々が価値観を変えてくれました。本当に必要なものは何か。東北の被害を見て自分にできることはないのだろうか？何かしたいけど何ができるかわからない。そんな毎日の繰り返しの中で幡再に出会い、気になるけど一歩踏み出せずにいた。 勇気を振り絞り活動に参加して、求めていた答えに出会えた。足りなかったピースが埋まり自分自身しっくりくるようになりました。

生き方を教わった場所です。

迷わずに一度行ってみて欲しい!!と言える場所です。

清水 萌子

都内近郊に住み、農業に関心を持っていた清水萌子さんが生木葉ファームでの活動を通して感じたこと、考えさせられたことを話してもらいました。

幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけをお聞かせください。

今年の3月に震災関係の催しを探していたら、知人が勤める都内のカフェの近くの会場を見つけて、不純な動機ですけど知人にも会えるし音楽のステージもあって賑やかそうだなと思って、フラリと足を運んだら幡再ブースに遭遇しました。

いただいた冊子のなかでBRAHMANという文字を見ました。単語自体は仏教用語として知っていましたが、バンド名とは知らなかったので宗教絡みの団体かと思いました…。すぐに間違いだってわかりましたが（笑）

幡ヶ谷再生大学の活動は生木葉ファームが初めてですか？

生木葉さんが初めてです。農業に関心があって参加を決めました。

生木葉の雰囲気、思い出深い光景や思い出があれば聞かせてください。

寄せ集めのよそよそしさがなくって、不思議なくらい仲間意識もあって和やかな雰囲気だと思いました。

思い出は…。生木葉のおかあさんが畑から葉物野菜を採って、そのまま「はい、かじってみて」って手渡してくださったことがありました。「放射性物質を気にしているんじゃないかしら」といった余計な気をまわすこともなく、生産者さんにもそういうネガティブな感情が払拭されているように感じました。

生木葉さんと幡再の方々との関係から生まれた信頼なのかなと思って、素敵な場所だなと感じました。

それと、私もみなさんもミニトマトをもいで土埃も拭わずにそのまま食べていました。あとになって、これも幡再の雰囲気なのかな？と思いました。

メールの中で「毎回、貰いものをしています」とありましたが、具体的に教えてください。

一番は声を聞いて、一緒に過ごしたことで、自分も頑張ろう！楽しもう！という気持ちに引きずり込まれたことです。

参加者が大好きなバンドやライブのことではしゃいでいる姿を見たり、一緒に作業や話をしているうちに、今までの自分は、自分の行動に自信がもてずにいたことに気づきました。そんな自分は、アホだなって思ったら無駄な悩みがずいぶん消えました。

活動の中で地元の親御さんのお話を伺って、地元産を買いたいけど子どもの体のために避けていることへの罪悪感と食べさせることを選んだ心の葛藤を知りました。

心にどれほど溜めこんで日々を乗りこえて生活されてきたのか、言葉を詰まらせながらお話をされる反面で「地元だから」、と作業ではテキパキ動かれて明るく接してくださる力強い姿は、本当に格好よくて憧れました。

正しいと思うことを選ぶ困難や責任と、それでも自ら選択するために思考することの大切さを、福島の方やこの活動を通して感じました。そして、自分は?と考えていたら、大切にしたいことと要らないことがかなり整理できたように思います。

まだまだ漠然としていますが、知り合いができたり、農業をもっと知りたいなと思えたり、食べ物について改めて考える機会をもらったり。野菜やおいしい食事も…。貰いものは山ほどあります。

初参加のとき、大好きなバンドが同じとか仲間内で集まっているのかな、と心配でした。でも、日頃ライブ空間で人と精一杯はしゃいでいるからなのか、開放的だけど真剣で、一体感があるけどちょっと不器用ながら自由に立ち回れる人の集まりで、バンドじゃなくて幡再に参加してここにいる時点で仲間なんだなあ、って拍子抜けしました。初めから色々と素直に受け入れられたのは幡再だったからかなと思います。

個人的に風評被害は当初よりは弱まっていると感じています。いまだ根強いものを感じますか。

根強いというか、しぶといというか、当初のような風評に今も取り憑かれている人がもしいるとしたら、これからも警戒しつづけるんだろうなと思っています。

故郷を奪われる、という現代では考えられない事態が実際日本で起こっている現状をどのように思われますか。

私は逆に、科学が進歩し平和がつづいてきた「今の日本」だからこそ起きたことだと考えています。

原発事故を何となくでも知るにつれて、過信、慣れ合い、依存はなかったのか、時間の経過は危機感を薄れさせてきたのではないのかな、強大な科学の力をきちんと制御する体制に関係者は理解と自信をもって稼働しつづけていたのか?と思うようになりました。

事故後も、避難先から故郷に帰れる時期が幾度も先伸ばしになっていることや、支援が唐突に打ち切られるなど不安定な点があることを知りました。このような情報から、原発事故が発生してしまったときの各組織の訓練や対応計画は充分に整っていたのかと疑問を感じました。

そして私自身が原発の危険性や放射能を意識したことがありませんでしたが、“原爆を落とされた国”の一人としてもっと知っておくべきことがあったのかな、と今になれば感じることができます。

メールの中で「放射性物質への恐怖が過剰」とありましたが、活動を通して払拭されましたか?

どうして避けるのか、その理由の一つは理解できました。見た目も生産の苦労も変わらないし、風評だと分かったのに福島県産が叩かれつづけていることが理解できず、避ける人は「放射性物質への恐怖が過剰」だと考えていました。

ですが、生木葉さんで親の立場にある方々のお話しを直接伺う機会があり、福島県産の食材について「親として子どもへの影響が心配」という心境を聞いて今更ながら納得しました。いわき市在住の方から、地元産を避けてきた罪悪感があった、というお話しをうかがって自分の考えの浅さが恥ずかしくなりました。テレビで同じような話を聞いたことがあるはずですが、このとき直接うかがって初めて心に残りました。

印象的だった参加者の姿があればお聞かせください。

誰というのはないですが、大人も子どもも素直です。生木葉さんの昼食時、一人一人からお皿を預かってサラダを盛っていたら、初対面でも「ブロッコリー好き!!トマトヤダ…」って申告してくれました(笑)

幡ヶ谷再生大学の活動はどう思われますか?

おもしろいです。充分に交流する機会やゆとりがあって、勉強会もあるので活動後も色々考えさせられます。全体が1日同じ方向を向いて活動をしているけど、参加者一人一人がその先の方向性を見出だす後押しをしてくれる不思議な活動です。あとは、気持ちのいい場所。活動終わりに「ありがとうございました」って言うと「いやいや、こちらこそ」と返ってきて、逆の立場なら言わずにはいられない。知り合いとか関係なく、一緒にいる人全体が仲間だって意識を持っているから素直に影響し合えるのかな、と思います。

清水さんにとって幡ヶ谷再生大学とは?

自分と他者との境目を気づかせてくれた場所ですね。参加前よりも誰かからの優しさが心に沁みて、意志が明確になった気がしています。そして、参加に迷っている人がいたら、迷わずに一度行ってみて欲しい!!と言える場所です。

今の状況で、自分はどちら側の人間でいたいのか

井上 光憲

三重県から幡ヶ谷再生大学の活動に足繁く通う井上光憲さん。
関西地方で住む彼が感じた「温度差」や福島への想いを話してもらいました。

井上くんと幡ヶ谷再生大学との出会いを教えてください。

私は大学に長く在籍していたので、震災のあった2011年3月まで京都で学生をやっていました。日本が一番混乱している時期に、卒業と就職という時間も金も余裕のない状況にいました。

当時の日本は「自粛」と「批判」と「買い占め」など色んなところで飛び交っていて、その状況に違和感を覚えながら何もできずにいて、非常にもどかしく感じていました。

震災から1ヶ月と少し経って、私は三重県で働き始めていました。当時すでにBRAHMANは支援活動を始めていたのですが、どこか他人事のように情報だけ見ていた気がします。そんな頃に名古屋ダイアモンドホールでのBRAHMANのライブに行った時、TOSHI-LOWさんのMCで自分の中のモヤモヤが全部吹き飛ばされました。「今の状況で、自分はどちら側の人間でいたいのか」と自分の心と向き合った結果、募金やボランティアなどの復興支援活動に参加するようになりました。その日のBRAHMANの物販で過去に販売されたTシャツを売っていて、その売上はすべて募金になると聞いたので購入したり、水や食料などの物資支援にも継続的に協力させてもらっていました。

実際に幡ヶ谷再生大学に参加したのは2012年4月の小渕浜での活動が初めてですが、自分の在り方に影響をもらったという意味では震災直後の名古屋ダイアモンドホールが大きかったですね。

井上くんとは小渕浜の公園作りや各地の出店などでもお会いしますが、「幡ヶ谷再生大学が農作業をする」と聞いたときの心境をお聞かせください。

最初は少し意外に思いましたが、参加して話を聞いていく中で「なるほど」と思いました。幡ヶ谷再生大学の独特さは、活動の直接的な結果だけが目的なわけではなく、参加者が活動を通じて繋がりを作って体験しながら学ぶという目的にも重点が置かれていることだと考えています。

その意味では、福島という場所での農作業というのは、福島が今抱えている問題を体感しながら学ぶには最適のチョイスだったのでは、と今は思っています。

実際、生木葉ファームで農作業をしたときの感想を聞かせてください。

農作業自体が初めてだったので、単純に楽しく活動できました。各現場のリーダーの方々が、生木葉側のリクエストと参加者の作業をスムーズに結び付けてくれていて、その分だけ達成感は大きかったです。単純な慣れ以上に、地元との繋がりがあるからこその動き方なのだろうな、と感じました。

もう少し深い感想としては、土地を耕して作物を育て、みんなで食べて命を繋ぐという、生き物としてシンプルで根本的な営みを感じました。文明がどんな風に発展していっても、こういった地に足を着けた営みから離れられないという実感がありました。「人と土地、人と食、人と人」という循環を奪うような文明の在り方というのは本末転倒だという気がしています。

そのなかで、とくに印象に残っている思い出があればお聞かせください。

農作業とは直接関係ないのですが、2014年12月に生木葉ファームに伺った際に、子どもたちと一緒に餅つきをしたことですね。子どもたちの笑顔の屈託のなさを見て、我々大人が守っていくべきものを再確認出来ました。

ボランティアなどの具体的な活動に限らず、日常の一つ一つの行動が未来を作っていくものなので、子どもたちに対して胸を張れるよう常に気高く行動していきたいと、改めて思いました。

幡ヶ谷再生大学に望むことや改善点があればお聞かせください。

ゆかりさんも仰っていることですが、「もう少し早目にスケジュールを決めてほしい」ということと「関東圏以外でのブース出展も多くして欲しい」ということですかね。どちらもスケジュール的になかなか難しいというのも重々承知していますが、是非よろしくお願いします。

井上くんは関西出身とお聞きしていますが、関西と東北では温度差は感じられますか。また、現在福島県の置かれている状況への想いがあれば、聞かせてください。

関心のない人が多いと感じます。東北のことを会話やSNSで話題に挙げても、何か他人事のような反応を受けることが多いです。私は普通の人として発信しているつもりなのですが、残念ながら「東北は遠くの場所で、そこに関わっているのは特別な人」というイメージがあるようです。何かのきっかけで、東北の被災者も支援者も普通の人たちばかりだと思えるようになればよいのですが…。

また関心のある人でも、「自分の考え方」「やり方」に固執するあまり、実際の東北の方々の心情とバランスを取れていない人も見かけることがあります。復興支援は相手ありきのコミュニケーションが基本だと思っていますので、関西人と東北人の気質はかなり違っているらしく、気をつけないといけないなと思っています。

原発事故に関しては、都市部の豊かな暮らしのために地方にリスクを押し付けてきた、日本人全体の責任だと思っています。本来であれば日本全体で負うべき業を福島の人だけに背負わせてしまっているのは、申し訳ない気がしています。

幡ヶ谷再生大学以外にも、福島県の南相馬や京都での子どもの保養合宿などのボランティアにも参加していますが、長年過ごしてきた家に戻れないお年寄りや将来を悲観している子どもと話すと、かけられる言葉のない自分に情けなくなりました。

また、政府の線引きで補償を受けられる人と受けられない人がいて、そこで人間関係も分断されていると聞くとやるせないですね。そして、風評被害というか、必要以上に放射能への不安を煽(あお)られすぎているとも思います。震災当初の政府の対応がまずかったせいで「正しい知識」や「正確な情報」に確証が持てない状況が出来た、と思うんですよね。

「安全だ」というのがウソに聞こえてしまう、そう思うほうが自分達にとっては一番安全だから、という情けない状況かな、と。「自分たちの安全のために福島を危険とする」という姿勢のせいで福島の人たちは大きく傷つけられて、判断の違いで人間関係も分断されている。

本来なら正しい科学的知識を身につけて判断すればよいのですが、その手間を惜しむほど関心のない人が多い気がします。原発事故に対する責任を日本全体で考え、その意識の元に福島の安全・危険を正しく判断することが今でも変わらず求められていると思います。

あなたにとって幡ヶ谷再生大学とは?

通常のボランティアにも幡ヶ谷再生大学Tシャツを着て参加することがあるのですが、「これは、どちらの大学なんですか?」と、よく聞かれます。そんな時「いや本当の大学ではなくて、ボランティア団体みたいな…」と答えています。

でも実際には本当の大学より大学らしく思います。本当の大学で学べることって「万人向けの知識」ですが、幡ヶ谷再生大学で学ぶことは「自分向けの知識」という気がしています。

他の誰でもない自分がどう在りたいのか、何ができるのか、ということをそれぞれが仲間と力を合わせながら模索していく場所ですね。その意味では、実際の活動にあまり参加できなくても「幡ヶ谷再生大学として」日々を生きていると思っています。

読者に一言お願いします。

活動の現場に参加するというのは少しハードルが高いのかもしれませんが、こんな風に活動に興味を持っていただくことで、日々の自分の生き方を見つめ直してもらえたらいいのかなと思います。そこから一歩踏み込んで、いろんな活動に参加してもらえたら更にいいですね。似たようなバックグラウンドを持っている人が集まるので、とても居心地がよく仲間もできるので、是非参加してみてください。

「本当にここにいていいものか」戸惑いつづける日々でした。

菅原 ミワ

福島県いわき市小名浜で生まれ育ち、ミーワムーラとして活動するシンガーソングライター。震災で津波と放射能の被害に遭い、見つめ直すなかで再開した音楽活動とその想いを語ってもらいました。

菅原さんと幡ヶ谷再生大学との出会いを教えてください。

出会いは、2014年2月にいわきで開催されたSTEP in FUKUSHIMAでした。

福島県在住とお聞きしましたが、幡ヶ谷再生大学の活動前から生木葉ファームをご存知でしたか？

知りませんでした。

生木葉ファームでの雰囲気、や思い出があれば聞かせてください。

自然に囲まれていて、植物や動物やそこを訪ねた人たちも、生き生きとしている雰囲気があります。

有機肥料を作る作業の手伝いをしたり、竹を割って子どもたちと流しそうめんをしたり、ヤギを繋いであるヒモが木に巻き付き、短くなっているのを直そうとしたときにヤギと一緒に木の周りをグルグル回ったことなど、印象的な思い出ばかりです。

そして何より、生木葉ファームさんで獲れた食材を使って、みなさんで協力して作ってくださる、お昼ごはんがとても大好きです。以前、「お昼ごはん、食べに来てください」のゆかりさんの一言に甘え、ライブの移動途中に立ち寄って、本当にお昼ごはんだけをいただいた時がありました。

「いいのよ、ライブの方が大事なんだから」と、またその二言目にすっかり甘え、我が家のように「行ってきまーす！」と言わんばかりに張り切って、お土産までいただいて次のライブへ向かって行きました。その時は、本当に嬉しかったです。

個人的に風評被害は当初よりは弱まっていると感じています。いまだ根強いものを感じますか？

個人的に現在は強くは感じておりませんが、地元の干物屋さんが店を閉める予定であることや兼業を必要とする現状を聞くと、ある程度の年数が経過してからの厳しさというものもあるのではないかと感じています。

放射能の被害と津波の被害に遭われたとお聞きしました。当時の状況を教えてください。

私は、福島県いわき市小名浜という漁業が盛んな町で生まれ育ちました。当時29歳だった私はそこから少し北へ進んだ、江名という小さな港町に住んでおりました。

古い借家で、地震で屋根は棟瓦部分を中心に崩れ落ちましたが、住めない状態ではありませんでした。高台にあったため津波の被害は免れましたが、そこからもっと下ったところの江名地区小浜や港周辺やその先の豊間地区の被害の光景を後日、目の前にして「これは本当に現実で起こった事なのか」と大変ショックを受け、胸が締め付けられる思いでした。

住んでいた江名では水も電気も完全にストップしてしまったので、私は愛猫二匹を連れて、車のガソリンを満タンにし、2つのポリタンクも灯油で満タンにし、小名浜の実家へ向かい過ごしていました。

それから福島第一原発事故が起き、完全に窓を閉め切り、外出を控える生活が始まりました。しかし、水と食料を確保するために家族やご近所同士で協力し合い、あちこち飛び回りました。

福島原発で何が起きているのか、この体にどのぐらいの放射能の影響があるのか、わからなかったため避難することを決意しました。

父の勤務する会社の関係で、家族と親戚一同を受け入れてくれる話があり茨城県の古河市近辺で共同避難生活を始めました。しだいに地元のことが気になりそれぞれ戻って行く中、私は4月1日にいわきに戻りました。

港の前の津波で破壊された家の瓦礫撤去作業の手伝いや、NPO団体からの支援による服などを避難所に配る手伝いをしながら「本当にここにいていいものか」「生活をしていけるのか」を戸惑いつづける日々でした。

真実というものが曖昧になっていき、身に起こっていることや人との関係性をもう一度、見直す時間と共に自分の中にある深い部分に潜っていきました。考えつづけ、同時に世の中のことにもっと関心を持ち「知らなかったことにもっと触れていこう」そして「とにかく動いていこう」と思いました。

次第に、自分にまずできることの一つ、音楽活動を再開しつづけていくことで、人との再会や新しい出会いが支えになっていきました。

「故郷を奪われる」という現代では考えられない事態が実際日本で起こっている現状をどのように思われていますか。

身近なこと、全体で起きていることに気付いて考えていく必要がありますし、一人一人の意識の変えるべきところは変えていかなくてはならないと感じています。

判断が難しいことも、良い悪いだけではなくもっと選択肢があるべきだと思いますし、何より、どんな現状にも関心を持つことが大事だと感じます。

2011年以前の音楽活動と現在とでは違いがあると思います。何が一番変化しましたか？

以前はマイペースな活動をしていたと思います。その後は、たくさんのミュージシャンとの繋がりが増えていきました。

いわきを盛り上げようと各地から演奏しに来てくださったり、関東、関西方面へ私たちを引っ張り出してくださったりしてくれました。人の繋がりでここまでやれているところもあるので、関わってくださったみなさまに感謝したいです。

これからも優しくしてもらったことを忘れずに大切にしていきたいです。

それが後押ししてくれたのもあり、やはり、自分自身の音楽に対する姿勢が一番の変化したところだと感じます。もう自分だけのことではなく、一人でも待っていてくれる人がいたらやっていきたいですし、何よりもそれが原動力になっていることです。

そう想えるようになったことは、とても幸せなことだと思います。

幡ヶ谷再生大学の活動はどう思われましたか？

個人個人が考え、自律に向けて、人として大事な要素を身につけられる実践の場ではないかと思います。

あなたにとって幡ヶ谷再生大学とは？

パッと思い浮かんだのが心身ともに"健康的な活動"だと思います。

読者に一言お願い致します。

私個人の感じたことや知っている範囲で答えさせていただきました。

私よりも幡ヶ谷再生大学の活動に積極的に参加し、ふさわしい方々がたくさんいらっしゃる中、このように今回関わらせていただいたことはとても光栄に思います。

当時のことをふたたび思い返し、整理するいい機会にもなりました。最後まで読んでくださったみなさま、ありがとうございました。

震災及び放射能の被害で、帰れない故郷を想い、苦しんでいる人達はたくさんいらっしゃいます。私はそれぞれ心が敏感になった経験があるからこそ、人の痛みを鋭くキャッチしてあげることができるようになり、人の温もりを強く感じることができるのだと信じております。

これまで経験したこと、感じたこと、勉強したことをこれからも謙虚に学んで少しずつでも表現していけるように、自分を含めそれぞれのステージに立つことを強く希望します。

なぜだか悲しいとかは思わなかったんです。

T・K

宮城県石巻市の小さな漁村・小渕浜で生まれ育ったT・Kくんは、公園作りはもちろんのこと、いわきでの活動にも参加してくれました。小学生で震災を体験し、16歳になった少年の福島、幡再、そして震災。

幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけをお聞かせください。

地元の小渕の公園作りの時です。

いわきでの活動にも参加しようと思ったきっかけを教えてください。

小学校の頃から福島に行ってみたくて、修学旅行で福島県に行く予定だったんですけど、震災があって秋田県に行き先が変わってしまいました。

福島県に行ってみたいな、って思っていた時に母から話をもらって「やっと行ける」と思って参加しました。

初めて訪れた「福島県」にどんな印象を受けましたか？

修学旅行で福島県に行った先輩たちが「のんびりしていて、温かい場所だった」という言葉通り、話し方や接し方など優しい人が多くて、とても素敵な場所だと思いました。

生木葉ファームさんでの活動は、小渕浜での公園作りと違いましたか？

作業は違っても幡再らしい活動、というか「みんなが同じ方向を向いている」っていうところは、場所が違っても変わらないと僕は思いました。

生木葉での活動に参加してみて、小渕浜での活動とは違いましたか？

変わらないです。見た目も。生徒のTシャツの色が変わったくらいです（笑）

印象に残った雰囲気や思い出深い光景があれば聞かせてください。

活動している方々が、どんなに暑い日でも、雨が降っている日でも、一つ一つの作業に一生懸命で楽しそうに行っているところがとてもかっこよくて印象に残っています。

個人的に風評被害は当初よりは弱まっていると感じています。いまだ根強いものを感じますか。

たしかに震災当初と比べたらだいぶなくなってきたように思います。

故郷を奪われる、という現代では考えられない事態が実際日本で起こっている現状をどのように思われますか。

たしかにすごい経験で悲しい体験だと思います。

僕も震災にあった人間になりますが、（2011年から）2年間はライフラインの切断などで生活は辛かったんです。けど……なぜだか悲しいとかは思わなかったんです。今だから言える話なんですけど…。

悲しくなかった？それはどうして？

当時を振り返ると風景が非日常すぎて「震災のことで悲しい」って考えるようになれるまで、2年くらいかかりました。

非日常を思い出せる範囲で聞かせてもらえる？

通学の道でも「あ、この家も無くなったんだ」、とか「この場所も流されたんだ」って悲しい気持ちになれるようになったのは、今から2年前くらいからなんです。

それまでも絶対に視界には入っているんですけど、入ってない…入れたくなかったのかもしれません。

幡ヶ谷再生大学の活動はどう思われましたか？

関わる人がみんな笑顔になれる素晴らしい活動だと思います。

あなたにとって幡ヶ谷再生大学とは？

新しい自分を発見できる場所です。

2011年の震災当時、小学生だったT・Kくんは、被災地の当事者しか知り得ない"非日常"を経て、現在は高校生活を送っている。

仲間を作ってくれたのが「幡ヶ谷再生大学」だと思います。

A

匿名でなら、とインタビューに答えてくれたAさん。
普段口にしにくいいわきの状況や葛藤する心の内を語って頂きました。

幡ヶ谷再生大学を知ったキッカケをお聞かせください。

club SONIC iwakiで行われたイベントのアサイラム（ASYLUM-Fukushima）で細美さん（the HIATUS/MONIOEYES）がゆかりさんを呼んでステージ上で紹介したときです。

幡ヶ谷再生大学の活動前から生木葉ファームがご存知でしたか？

存じ上げませんでした。友人が教えてくれて参加しました。

生木葉ファームでの雰囲気、や思い出があれば聞かせてください。

子どもたちがとくに遊具があるわけでもないのに自由に遊んでいる姿がよい雰囲気を作っていると思います。料理に不慣れな人でも会話しながら楽しく料理でき、作った料理もとっても美味しくて、みんなお皿いっぱいに選んで盛っていく姿が嬉しかったです。食事を一人ですることが多い昨今、食卓を大勢で囲み、楽しく美味しく食べる環境を改めてありがたくも大事だなと思いました。

生木葉のおじいさんが私をトラックの荷台に乗せて運んでくれたことも思い出に残っています。

印象的だった生徒の姿があればお聞かせください。

活動場所が様々ななかで私が印象的だったのは、中学生くらいの男の子です。たくさんのお子さまが彼に懐（なつ）いていて、一緒に遊んでいる姿が微笑ましかったです。

それと、三ケ田さんの奥さまとゆかりさんの姿です。

いわき在住とお聞きしましたが、個人的に風評被害は当初よりは弱まっていると感じています。いまだ根強いものを感じますか。

当初よりは弱まっていると思いますが、根強いです。

現在でもいわきに住みながら地場産を気にしながら買う方もいて、それは本人たち、その家族たちの自由なのでいいと思ってはいます。これはよく家族と話すことなのですが、福島県の人たち自身が「安心」と言われている食べ物を避けつづけていたら風評被害は絶対になくならないと考えています。

福島県ナンバーが他県に行った時に「差別」があったと新聞で知り、個人的に大きなショックを覚えました。実際あったのでしょうか？

実際にありました。福島ナンバーというだけで車を蹴られたり、落書きされたり給油出来なかったり、と。

私の弟は他県にいます。当時そのニュースを目にした母が弟に「これから車を買うなら福島ナンバーは止めなさい」って言っていました。現在でこそ落ち着きましたが、福島ナンバーってだけで色々聞かれたら可哀想だから…と母は今でも心配しています。

「故郷を奪われる」という現代では考えられない事態が実際日本で起こっている現状をどのように思われていますか。

全く想像がつきません。着の身着のままで避難されて、それから自宅に帰れない状況は、自分がなってみないと絶対にわからないと思います。いわきは地域によって現在でも「被害がなかった地元の方」「被害があった地元の方」「いわきに避難している方」がいまだにイガミあっている状態です。

その原因は支給される賠償金です。

「もらった」「もらってない」の諍（いさか）いに始まり「あいつはもらってる」といった噂です。

震災から4年が経ち、避難されている方といわき市にまた人が戻ってきていることで人口が増え、地価が上がっていることもあり、元々いわき在住の方といわきに避難している方との溝は全く埋まっていません。また、避難している人も「避難している」と言えないのも現状としてあるんです。このことは家族では色々話し「もっとお互いが尊重し合えれば」と最終的に話はまとまりますが、家の外では進展がありませんね。

以前、渡辺俊美さん（TOKYO No.1 SOUL SET/THE ZOOT16）がSONICのライブで富岡の歌の前後に「何でうまくいかないんだろう」といったMCをして、涙ぐんでいたのを覚えています。

幡ヶ谷再生大学の活動はどう思われましたか？

はじめはガッチガチで色々話さなきゃと思いましたが、雰囲気が和やかで、壁みたいなものがなく、自ら動きつつ、勉強会で学ぶときはきっちり学ぶ。「最初はきっかけ作るけど、あとは自ら行動しようね」っていう印象を受けました。

勉強会では放射能の何が怖いのか、帰還困難区域である富岡の現状を知れたり、実際に使用している防護服に触れ、とても薄いことを知ったり出来ました。気になったことはその場で質問出来るのも良かったです。

幡ヶ谷再生大学はグッズの売り上げと募金だけで活動している、と聞いたとき、美味しいご飯や生木葉さんでの活動も全国のみなさんからのご支援で成り立っているんだな、と改めて感謝しました。支援を頂いていたからには活動のきっかけとてし「今後は自ら動いていかないといけないな」とも考えさせられました。

また、細美さんが「ゆかりさんは怖いぞ！」って話していたように、ゆかりさんは支援して寄り添いながら、的を射ていることをズバッと叱ってくれるので、素敵な方だと思いました。普段の生活ではこのような経験はできないはずです。相手のことを思って叱ることのできる人がいる幡ヶ谷再生大学の活動は素敵だと思います。

共感して支援する人がいて、地に足の着いた活動をし、運営する人がいる。考え方や動き方、接し方を見ていると「気高く生きる道を選択します」を貫いているな、と思いました。

読者に伝えたいことがあればお願い致します。

私はある人にいわれのない誹謗中傷やイジメを受け、思い悩んでいた時期があり、死のうとしたことがありました。そんなときに震災がありました。

それからSNSの書き込みで放射能の風評を知り、未来に絶望し自殺を選んだ方々の情報を新聞やテレビといったメディアで知り、私自身の経験もありとても切なくなりました。現在でもニュースで悲惨な事故や事件が起こったとき「誰かに相談すればよかったのに」って思う方って多いと思うんです。でも、悩んでどうしようもなくて実際、相談したのに助けてもらえなかったケースって確実に多い、ということを伝えたいです。

個人では本当にどうにもならなくて、周りに相談したけど誰も助けてくれない。私は、母が運転する車に乗っているときに大通りでかなりスピードが出ている時にドアを開けて落ちようとしました。私の死をもって誹謗中傷やイジメをしていた人たちが気づいてくれないかな、誰か私の辛さに気付いてくれないかな、誰か助けてくれないかな、と一瞬ですが思ったからです。私の場合は最後に救ってくれたのは母親でした。

幡ヶ谷再生大学の存在を知り、活動に一歩踏み入れてみました。活動に参加して人と触れ合った上で、自分で解決の打開策を見つけるか、見つからなければ、頼れる人を探す手伝いをしてもらってもいいと思うんです。幡再に参加される方はきっと相談に乗ってくれると思います。

あなたにとって幡ヶ谷再生大学とは。

幡再冊子vol.3の編集後記の中に「不器用な人間たちの学び舎」という一節がありまして、まさにその様に思いました。私がゆかりさんにぶつけた思いは、不器用なうえに痛烈な「言葉にしちゃいけない」という一種の強迫観念みたいな想いがありました。私は脱原発という考えではないんです。これはライブ後の俊美さんともお話をさせて頂きました。お疲れのところ真摯に耳をかたむけて貰えました。私の考えていることを誰かと共有と共感したい、意見を聞きたい、寄り添いたいと常々思っていましたが、ギクシャクしているこの町でなかなか口にすることはできません。家族で話すぐらいですが、まだ全てを話せてはおりません。

こんな私の不器用ではなく、できなかった思いを伝える場所、仲間を作ってくれたのが「幡ヶ谷再生大学」だと思います。

一歩踏み出す勇気をもらいました。

三ケ田 麻菜美

DVD「鼎の問　ー 幡ヶ谷再生大学 映像記録 ー」にも登場する三ケ田 麻菜美さん。
幡再のいわきでの活動を陰で支えてくれて、震災前から生木葉ファームに通っていた彼女に心境の変化を話してもらいました。

幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけをお聞かせください。

夫が石巻小渕の公園作りに参加したことがあって、帰宅後に幡再の話をしてくれたのが最初のきっかけでした。

幡ヶ谷再生大学は昨年の8月9日に初めて生木葉ファームを訪れましたが、前日の心境など教えてください。

前日は全く落ち着きませんでした。というのも私は極度のあがり症で、当日午後の勉強会で自身の話をすることが決まってからは終始ソワソワ。私に務まるのだろうか、と不安で仕方がありませんでした。

それと、初日を迎えるにあたり生木葉さんの土壌や野菜の測定を福島高専の布施雅彦先生（冊子P7）にお願いしたのですが、これは私にとってとても踏み込んだものでした。

生木葉さんが震災後すぐに表土除去の取り組みをしたことは知っていましたが、野菜など数値的に実際どうなのか、気になっていたのが本音です。JAの測定だけではなく、もっと詳細な値を知りたい。でもそれを口に出していいものか…おじいちゃんたちの苦労を思うとずっと聞けずにいましたが、そこに一歩踏み出す勇気を幡再のゆかりさんからもらいました。その感謝の気持ちでも胸がいっぱいな前日だったと記憶しています。

初日の雰囲気、思い出深い光景や思い出があれば聞かせてください。

初日は学長のTOSHI-LOWさんやTEAM　BRAHMANの方々 、幡再スタッフの方々、幡再生の方々、club SONIC iwaki関係者に地元のお母さんや子供たちで、生木葉さんが久しぶりに活気に満ち溢れていました。それが只々嬉しくて、途中何度も目頭が熱くなってしまいました。

震災後、子どもたちが地元で農作業をしたのはこの日が初めてでした。ほとんどの子がそうだったと聞いています。地元で久しぶりに触れる畑の土、採れたての野菜を安心してほおばれる喜び、震災前は当たり前だった日常をこういった形で少しずつ取り戻していくことができて、本当にありがたかったです。

幡再生の若々しく頼もしい雰囲気も新鮮で眩しかったです。みんなが笑顔で作業していたり、ご飯を共にする姿はとても印象的でした。生きる上で「楽しむ」という忘れがちで一番大切なことを、その姿からいつも教えてもらっています。

個人的に風評被害は当初よりは弱まっていると感じています。いまだ根強いものを感じますか。

風評被害自体は私個人も前より感じなくはなりました。以前は福島産というだけで嫌悪したり勝手な憶測を平然と言う方もいて、そういった情報に惑わされたり、近しい生産者の方を想っては悔しい気持ちになっていました。

子どもが通う幼稚園は、市内でも特に放射能対策をしているのですが、放射線の勉強会や講演会を園で開き、知識を深めたおかげで保護者の漠然とした不安も徐々に緩和され、遠方で入手できない野菜は検査した地場産のものを使おうといった状況にまでなってきています。

先日、生木葉おじいちゃんも「風評被害はだいぶ弱まってきているが、注文があっても年齢的に生産率を上げられない状況」だと話していました。それでもそんな嬉しい悲鳴も聞けて少しホッとしています。

けれど、出荷制限がかかっているものや、今も農作物が売れないと話す農家さんの話を耳にすると、実害がある以上、風評被害を払拭するのはまだ時間がかかるのかなと思ってしまいます。

今後も地道に測定しデータを残していきながら、詳細な数値を知った上で不安をぬぐうきっかけを作っていけたらと思っています。

故郷を奪われる、という現代では考えられない事態が実際日本で起こっている現状をどのように思われていますか。

被害に遭われている方々にかける言葉さえ見つかりません。とても悲しく辛いことだと受け止めています。

放射線の勉強会で富岡の平山さんがご自身のボランティア活動の話しをして下さったんですが「帰宅困難区域であっても帰郷したい」と話すお年寄りの心情を聞いて、とても胸が苦しくなりました。

日常に追われて生活していると色々と忘れてしまいがちですが、これからも避難している方々に想いを寄せつづけていきたいと思っています。

毎回、最後まで"生徒"を見送っていますが想うことがあれば、お聞かせください。

只々感謝の気持ちにつきます。

震災後ずっと頑張りつづけてきた生木葉さんを沢山の人に知ってもらいたい、その一心だったので、こうして様々な人たちに来てもらえることが本当に嬉しいです。初見の方、久しぶりの方、全ての人にその気持ちを少しでも伝えられたらと思って見送っています。

印象的だった生徒の姿があればお聞かせください。

第一回目の勉強会で私が話した時に寝てしまった男の子がいたんですが、終わったあと正直に謝りに来てくれたんです。そのとき「なんて素直で真面目な幡再生なんだろう」と、とても驚きました。

幡再で生木葉さんを知り、それ以来個人で自主的に農作業のお手伝いに来てくれる方もいました。その姿勢もとても印象的で、自主性の見本を見せてもらった思いでした。

誰が何を言わなくても皆それぞれに自分で役割を見つけていく、いつの間にかそんな雰囲気が生まれているのが幡再の凄いところだと思います。ご飯作りのお手伝いのことを話していなかったのに、エプロンを身につけて来た地元のお母さんがいた時もとても嬉しかったです。

幡ヶ谷再生大学の活動はどう思われましたか？

参加者の一人として、とにかく楽しかったです。自ら動き出すことで生活がより豊かになることや、新しいことに色々挑戦することで自分の可能性が拡がることを知りました。

幡再で繋がった沢山の人たちとの出会いは、私たち家族にとって大切な財産です。その出会いから活動や行動を始めるキッカケを頂いています。これからもそれらを大切に育んでいきながら、様々な場所に出向き、色々感じ考えていけたらと思っています。

あなたにとって幡ヶ谷再生大学とは？

自分自身と向き合う場ですね。大人になってから、日常とは違う何かがあるとつい臆病になってしまいがちでしたが、幡再はそんな弱気を吹き飛ばす力がありました。幡再に関わる全ての人たちに出会えて本当に良かったです。

読者に一言お願いします。

今は月に1回「自主練」と称して生木葉さんで農作業のお手伝いをしています。是非足を運んでみて下さい。

きっと見ないこともできるし、聞かないふりもできるけど…

片平 里菜

2015年3月11日に発売されたDVD「鼎の問　ー 幡ヶ谷再生大学 映像記録 ー」では、ナレーションを担当したシンガーソングライターの片平里菜さん。幡再の活動を通じて感じたことや福島のことを語っていただきました。

片平里菜さんと幡ヶ谷再生大学との出会いを教えてください。

幡ヶ谷再生大学の活動に参加するようになったのは2012年の5月からです。

当時は高校を卒業したばかりで自分の活動で精一杯でもあり、気持ちがなかなか行動に繋がらずもどかしく感じていたのですが、音楽活動をつづけていろんな方と出会っていきました。

そんな時、いわきSONICの三ケ田店長や地元の音楽友達に幡ヶ谷再生大学の存在を教えてもらいました。

片平さんは生木葉ファームの近所だとお伺いしましたが、「幡ヶ谷再生大学が生木葉ファームで農作業をする」と聞いたときの心境をお聞かせください。

生木葉ファームの活動に参加したあとに知ったことなのですが、母親の生まれ故郷が生木葉ファームさんのすぐ近くだったそうでとてもご縁を感じました。

母はよく「家のそばには川があって、水がものすごく綺麗だった」だとか、豊かな自然に囲まれた故郷のことをよく話していましたし、私自身小さい頃に行った記憶が残っています。

そんな自分のルーツになっているこの土地が福島というだけで警戒せずにはいられない場所になってしまったこと、考えるほど不安や憤りを覚えますが、それでも食の安全と向き合っている方々の背中に自分を正されている気持ちでした。

実際、生木葉ファームで農作業をしたときの感想をお聞かせください。

私が参加させてもらったのは豆の収穫のときでした。選別をしたり、乾燥した枝についたさやをたたいて取ったり、寒さのなかかじかんだ手での作業は一つ一つとても手間のかかるものでした。

正直、世に出回っている"もの"が"もの"によってはどれだけ安全なのかは定かではないし、福島に限らず見えないものを見えるかたちで安全と安心を作っていかなければならなくなっていることに気付かされました。

その中で、とくに印象に残っている思い出があればお聞かせください。

生木場ファームにいるヤギや子どもと遊んでいたり、みんなでお話しながらごはんを食べたのがとってもいい時間でした。大量生産や効率化が一般的になっているけれど、今回の体験を通して、作り手の顔が浮かぶような地域のものを消費していくことが、きっと本当の豊かさなんだ、と改めて実感しました。

幡ヶ谷再生大学DVD「鼎の問」でナレーションを担当されましたが、そのときの心境をお聞かせください。

ガイガーカウンターの鳴る音、生の人間が生の福島を訪れたときの空気感、わたしも何度か双葉郡に足を踏み入れたことがありますが、なぜだか言葉が出なくなりました。

震災以降、今までずっと動きつづけてきた幡ヶ谷再生大学の先輩たちの言葉だからこそ、ひとつひとつが重厚で心に響いてきます。わたしがそれを損なわないようにしなければと緊張しましたが、映像を見ていたら自然と気持ちが落ち着きました。

音楽活動をつづけていくなかで福島県への想いは、やはり普遍的なものでしょうか？

きっと見ないこともできるし、聞かないふりもできるけど、福島や東北で出会ってきた人たちやそこで新しく生み出されるものが好きです。震災があってもなくても、ただ大事な人たちがいる町や自分の故郷との関係はずっとずっと続くような気がしています。

片平さんにとって幡ヶ谷再生大学とは。

ボランティアとか慈善事業とかそういうものとはちょっと違います。幡ヶ谷再生大学は、人としての活動。いろんな場所に行っていろんな人に会うたび、いつも無力を感じるけれど、結局なにかを動かしていけるのはひとりひとり個人。

少しでも関心を持ってもらえたら嬉しいです。

最新情報

2015年12月9日発売　東京スカパラダイスオーケストラ
ニューシングル「嘘をつく唇」にゲストヴォーカルとして参戦

何を言われようが変えなくていい部分だと思う。

YOH (ORANGE RANGE)

ORANGE RANGEのベーシストとして活躍されるYOHさんは、小渕浜の公園作り、生木葉ファーム、そして東京での公開講座と、幡再のあらゆる活動に沖縄から足を運んでいます。沖縄県で生まれ育った彼が想う福島県とは。

YOHさんと幡ヶ谷再生大学との出会いを教えてください。

震災後、幾つかの活動に参加させてもらっている中で、VIRGO（アパレルブランド）のYUさんから幡ヶ谷再生大学の話を聞いて。自分の中で共感できる部分が多く、参加を決めました。

小渕浜の公園作りにも何度も参加いただきましたが、「幡ヶ谷再生大学が農作業をする」と聞いたときの心境をお聞かせください。

遠くから眺めているだけではなかなか気づけない部分があるというか、直接来ないとわからないことがあると思っていて。今回も直接参加しようと思いました。

実際、生木葉ファームで農作業をしたときの感想をお聞かせください。

農作業の大変さはもちろんですが、生産者の葛藤、震災前から足を運んでいる方々の葛藤、いろんな想いが重なっているということと、生木葉ファームという場所が今も変わらずみんなに愛されている場所なんだということが伝わってきました。

その中で、とくに印象に残っている思い出があればお聞かせください。

空気がとても澄んでいたこと。

メンバー全員でも来てくれましたね。メンバーのみなさまは何か仰ってましたか？

作業後の採れたての落花生が美味かった、と言っていました（笑）

YOHさんは沖縄県という特異な環境で育ったわけですが、現在福島県の置かれている環境への想いがあれば聞かせてください。

安易に同じ括（くく）りにとは思わないですね。

ただ複雑な問題を両県とも抱えている中で、安心して暮らしていきたいっていうのは共通の意識だと思っているし、何を言われようが変えなくていい部分だと思う。

YOHさんにとって幡ヶ谷再生大学とは？

一度でも足を運ぶとその町に対して思い入れもできますし、時間が過ぎていく中でも「あの人、元気してるかな」って顔を思い出したり…とかって、やっぱり普通にあると思います。

その回数を多くしていけたらいいな、と。

また幡ヶ谷再生大学でお会いしましょう。

横浜市立大学

HATAGAYA RE-BIRTH UNIVERSITY
OPEN LECTURE
幡ヶ谷再生大学公開講座

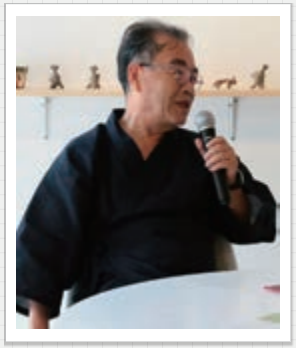
想いを行動に、そして形に…。
震災直後から東北の沿岸部で活動を続け、たくさんのつながりが生まれ、広がりました。
この先は、自ら思考し判断できる力が必要になると考え、今までのように現場での体験と併せ、新たに学びの場を設けました。

それが去年8月6日に福島での活動を始めると発表したことであり、8月9日いわきでの最初の農作業と勉強会でした。
奇しくも8月6日と8月9日は、広島と長崎に原子爆弾（原爆）が投下された日でした。
今から70年前の1945年のことです。

第二次世界大戦中に原爆を製造する過程で原子炉が開発され、その原子炉から原子力発電所（原発）は誕生しました。
福島と広島・長崎、そして原発と戦争は、切り離しがたくつながっています。

私たちの現在は、過去からの積み重ねです。
そして今この瞬間は、未来を創る1歩です。
この先に、さらに先に、どこに歩を進めようとするのか。
謙虚に、そして自覚的に学び、知ることを改めて大切にしたいと思いました。
そして学ぶこと、それ自体が持つワクワクとした楽しさや広がりを感じられたらと思います。

学ぶことは己と向き合い、生きる道を選択すること。
幡ヶ谷再生大学復興再生部、公開講座はじめます。



終戦70年にあたる今年2015年8月9日、幡ヶ谷再生大学は東京都渋谷区にて「戦争体験者の話を聞く」というテーマで初となる公開講座を開催した。講師の青木重夫さん（日本画家）からは、戦争への道のり、戦争の悲惨さをその時代を生きた当事者の目線や体験を通し、現在につながるお話をしていただきました。

戦争を知らない我々現代人にとって興味深い講義になった。実際、講師との質疑応答では熱を帯び、終了予定時刻を2時間ほどオーバーして第一回公開講座の初回を終えました。

講座終了後、参加者にアンケートを行いました。一部抜粋して記載します。

参加したきっかけはお聞かせください。

・戦争も原爆も、我々次世代が知らなすぎるため。　E・Sさん
・戦争を後世に伝えるために必要なことだと思い。　A・Yさん
・大人になってからこういった話は聞こえが全くちがうものだと改めて強く感じました。　K・Tさん
・安保法案など興味があったから。　N・Wさん
・10月に子供が生まれるので、子供に戦争をどのように伝えるか夫婦で考えたかった。　N・Nさん
・最近読んだ本で「近頃の人は知らないことを恥ずかしいと思わない」という言葉を見つけてドキッとしました。～中略～法律が動きつつある今、自分なりの考えを持つべきだと思っていたので。　M・Sさん

講座の感想をお聞かせください。

・自分が考えて行かなければならないこと、行動して行かなければならないこと、のヒントが沢山ありました。もっと学びたいと思いました。　A・Yさん
・「隣人を愛せ」と聞いて、ウルトラマンや仮面ライダーの作者も自身の戦争体験を、作品を通して平和を訴えた、と聞きました。そのことを笑う人もいたとも聞きます。けど、大事なことだと改めて確認しました。　T・Mさん
・長崎の平和宣言を午前中に読んでいて、やはり今日は70年前の日本のことを知っている方のお話を聞きたいなぁと思い、Twitterでの告知を見て勢いで来ました。結果、本当に来て良かったと思います。　THE FUTURE TIME編集部
・急に戦争にはならず、まずは教育からゆるやかに変えていく政治の汚い方法は知っていたが、今日の青木さんの話を聞き改めて自分たちで考え、行動して、教育、憲法、戦争をしない日本を維持していかなくては、としみじみ思いました。　A・Yさん
・ひとまず選挙に参加します。　無記名
・教育やメディアによる洗脳がとても怖いことだと感じました。E・Sさん
・やはり、戦争は絶対にしてはいけない、という思いがより強くなりました。二度とこの国が戦争に向かわないように、自分ができることをしていきたいと思いました。　K・Aさん

2014年1月11日に完成した小渕浜のこども公園。
2015年7月26日から小渕浜地元の主導で自主練と称する自主的な公園整備が始まりました。
10月12日の自主練に参加したMONOEYESの自称高校生コピーバンド「みかん公園」の細美武士（Vo&G）による命名で、小渕浜の公園は「みかん公園」を襲名しました。

みかん公園Tシャツができました

幡ヶ谷再生大学xみかん公園のTシャツを作りました。小渕浜みかん公園で定期的に募集する自主練習や幡ヶ谷再生大学が出展するイベント等で販売予定です（現在通販はおこなっておりません）。
Tシャツの売り上げはみかん公園の運用管理資金として使わせて頂きます。

小渕浜みかん公園ウェブサイト
http://hatagaya-saisei-univ.jp/rebirth/park/

✔編集後記

その昔、日本には「村請制（むらうけせい）」という制度があったと聞く。
経済の仕組みが現代とは根本的にちがうため比較は困難だが、要約すると「年貢などの責任を村全体で請け負い、村から破産者を出さない」という制度である。
わるく言えば「連帯責任」であり、よく言えば「村の中で困っている人がいたら、村全体で助けよう」というものだ。明治時代になると「村請制」はなくなり、富国強兵策がとられ、昭和20年8月15日までその道を突っ走っていくことになる。その後に待っていた日本の姿は周知の事実だろう。

幡ヶ谷再生大学は2014年8月9日、福島県いわき市にある生木葉ファームで活動をはじめ、2015年7月5日に一旦の区切りをつけ、その日に参加者同士で意見を出し合った。その話し合いの内容や感想をメールにしたためてもらった。
メールやその後のインタビューの中で「野菜が美味しかった」という意見がおおく聞かれたが、それもそのはずで生木葉ファームは味を評価され多くのメディアに紹介された農場である。
いわき市には「1日1組限定」の有名フランスレストランがある。そこのオーナーシェフは、営業日の朝に生木葉ファームで野菜を買い付けている。「地元いわき産の野菜でお客様を最大限にもてなす」という試みだ。そのことによって農家の食材がブランド化していく、という狙いがあるそうだ。この動きが活発化すれば、斜陽産業にみられがちな日本の農業も活発化していく、と他業種でありながら地元の活性をも見据えている。

この発想は震災にあったという。

それまでは１日1組限定ではなかったが、震災から数ヶ月間は客足が遠のき、お客が来始めても1日に1組か2組。廃業まで考えたそうだ。それでも来てくれたお客様に一生懸命に料理を提供し、これからは料理を通してお客様に恩返しをしていきたい、と考え「1日1組」という発想が生まれたという。現在、いわき市だけでなく日本全国にも、産業をとおして地場の活性に寄与する店舗や会社は少なくない。

知らなかったものを知ってもらう、ということは有益だが、偏見や情報を鵜呑（うの）みにすることほど恐ろしいものはない。

こんな話を耳にした。2011年の震災直後のいわき市は風評被害そのものだったそうで、子どもがいる家族が親戚を頼って他県に避難すると、親戚は「この県で買った物に着替えて、家の敷居をまたいでくれ」と悪びれずに言ったそうだ。
実際に日本で起こったことであり、現在でも起きていることなのを日本人ならば忘れてはならないはずだ。非難からは何も生まれないが、悲しみや苦しみに傷ついた心に寄り添うことから生まれるものはきっとあるはずだ。
実際、ドラッグストアでレジの仕事していた“生徒”が、睡眠導入剤をさがすお客さんに商品を紹介した際「震災で精神的に鬱（うつ）になっちゃって…」って小声で伝えられたそうだ。「私も飲んでいますよ」と伝えたら、安堵した表情で商品を購入し帰って行かれたそうだ。

生徒は、精神的に参っている方に寄り添いたい気持ちがある一方、まわりからは「共倒れしそうだから頑張りすぎるな」と気にかけられるそうだ。現在でもいわき市には「賠償金をもらっている」と、言えない環境があることも聞かされた。
その、いわき市にある生木葉ファームの直売所は震災前、野菜のほかに焼き菓子が有名な店だったそうで、製作者は震災後、他県に引っ越してしまったため現在でも悔やむファンは多い。現在も野菜を目当てに来客は絶えないそうだが、直売所には「希望のかけ箸」という商品がある。
福島県の磐城杉、宮城県の栗駒杉、岩手県の気仙杉の3本セットで売られており、パンフレットには「折れない。」と記され、「気持ちで」「逆風に」「現状に」とページは続いている。
平成の世になった現在、幸いにして他県に無断で行っても「脱藩」とは言われない。ならば、日本で起こっている問題を、かつて存在した「村請制」のように自分のことのように思うこともできるはずだ。
そのときに問われるのが、冊子の中にもあった「どちら側にいたいか」ということだろう。そのときに必要なのが、折れない心ではないだろうか。

2011.3.11の震災以降、不幸にも毎年のように大きな天災が続いている。直近では、昨年の広島県で起こった土砂被害、今年の栃木県と茨城県での大雨被害が思い出される。
天災が起こると、そのたびに幡ヶ谷再生大学は被災地に入り、支援活動を行い、支援物資や募金を届けてきた。
今年の大雨被害での支援物資は、おもに9月12日13日に群馬県利根郡みなかみ町で開催されたNAC（ニューアコースティックキャンプ）の会場で集められた。キャンプをする場合、必要最低限の物しか持って行かないのが通常だが、予想に反して多くのタオルが集まった。
12日の未明にSNSに投稿されたとはいえ、2日間であれだけ多くのタオルが集まったのは、必要最低限以上の手間をかけ、心優しい多くの方々の被災地への“想い”がなければ、とうてい無理な出来事だったはずだ。
そして昨年、行動を共にしたSAVE THE HIROSHIMAの方々と支援活動を共にしたことも感慨深い。2012年3月11日に幡ヶ谷再生大学を“開校”して以来、全国各地に多くの同志が存在するのは、行動の力に共感し、継続の力で互いを支えあってきたはずだ。
そんな彼らでも人間である以上、心が折れる瞬間は必ずあったはずだ。それでも折れないのは、活動参加者の笑顔や感謝の言葉、ブース出展の際の心温かい応援、グッズの購入や募金、支援物資の寄付などの温かい手を差し伸べてくれる方々の存在があったからに他ならない。
人間復興を目指した団体は、苦しみや悲しみに傷ついた心に寄り添いながら、微力ながら日本の産業にも寄与する活動をしつつ、知らなかったものをより深く知ってもらう公開講座も新たに始まった。
やがてその活動は、失われた村請制のような思いやりのある心優しい日本人を形成していく源泉になるのではないだろうか。

Text by 山口 努(http://www.tmbnty14.com)
Photo by　上坂 和也

ご支援ご協力について

私達、幡ヶ谷再生大学復興再生部は音楽やスポーツを通じて繋がった仲間達、そして皆様のご協力のもと、長期的かつ継続的な復興支援を行っていくことができます。
現時点、当団体は専任のスタッフを雇用しておらずボランティアによる、少人数での運営となっております。
そのなかであくまでも現地との連携を直接的にすること、個人、団体、自治体に関わらず、私達の力を必要とする場所へ確実な復興支援を目指していきます。
随時、人手募集や物資の募集も行います。また皆様よりご支援頂いた物資や支援金は当団体が責任を持って復興の為に使わせて頂きます。
ご理解頂ける方のみ、ご賛同、ご協力お願いいたします。

幡ヶ谷再生大学復興再生部　http://hatagaya-saisei-univ.jp